

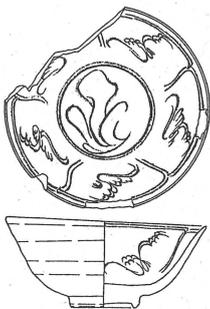
雲仙市文化財調査報告書（概報） 第5集

i ko

# 伊古遺跡

（中世編）

—古江地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査概報—



2008

長崎県雲仙市教育委員会



雲仙市文化財調査報告書（概報） 第5集

i ko  
伊古遺跡

（中世編）

—古江地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査概報—

2008

長崎県雲仙市教育委員会





遺跡上空（D区）から有明海をのぞむ（南より）



D 6 区出土土師質土器（本文16頁～35頁）



D 6 区出土土師質土器（本文16頁～35頁）



遺跡（E区）上空写真（南東より）



D 6 区完掘状況（南より）

## 発行にあたって

このたび平成18年度に実施しました古江地区圃場整備事業に伴う伊古遺跡の発掘調査の報告書（概報）を発行することになりました。当市は平成17年10月11日（<sup>と</sup>10に<sup>い</sup>11日）に7町（国見町・瑞穂町・吾妻町・愛野町・千々石町・小浜町・南串山町）が合併して誕生しました。「豊かな大地・輝く海とふれあう人々で築くたくましい郷土」の実現に向けて地域の発展を目指しています。

伊古遺跡は、島原半島の北側に位置し、標高約20mの扇状地台地上の水田地帯にひろがります。西側には西郷川が流れ、長い間脈々と営まれた古代人の農耕や生活の痕跡が永い年月を経て、発掘調査によってふたたび息を吹きかえしたことになります。遺跡の南側には雲仙普賢岳がそびえ、頂上付近には平成新山と名付けられた溶岩ドームが噴火の生々しさを今に伝えています。北側に目を移せば、眼下は有明海が広がり、佐賀県・福岡県・熊本県までも一望することができます。

これまでの調査において遺跡からは、縄文時代草創期から中世までの幅広い時代の遺物・遺構が発見されておりその埋蔵量は計り知れないほどです。縄文時代の遺物は土層堆積による部分的な文化層が検出されたのみで、残念ながら遺構は伴っていませんが、総出土点数約1550点を超え、黒曜石製細石刃や細石刃核などが多く出土しており、たいへん貴重な資料といえます。

今概報では遺跡より検出された中世の遺物・遺構について報告いたします。遺跡の周辺には中世の城跡である杉峰城跡や下田城跡などが分布し、中世の遺構・遺物が出土しています。伊古遺跡から検出された製鉄炉跡・道路状遺構・竪穴状遺構等からも、輸入青磁及び白磁をはじめ、土師器・瓦器椀・石鍋・緑釉陶磁器などの遺物が多数出土しております。石器を利用する古い時代から焼物の器を生活用品とする新しい時代までの期間、当地で暮らす祖先たちの生活の様相がうかがえます。

雲仙市の緑豊かな農業地帯も、近年の農業基盤整備に伴い大きく変貌しております。このような情勢の中で、祖先の貴重な文化遺産を保護し、これを後世に伝えることは、私たちに課せられた重要な責務であります。本市（旧7町）では、このような事態に対処するため、遺跡発掘調査を行い保存・保護に努めてまいりました。調査の成果を公開する一つの手立てとして報告書を作成いたしました。遺跡の宝庫といわれる本市にとりましては、貴重な歴史と文化を理解するうえで大きな役割を果たすものと期待しております。

最後になりましたが、今回の調査に当たり、地元地権者の皆様、工事関係者の皆様、大学・博物館関係の諸先生方ならびに長崎県学芸文化課の皆様のご指導に衷心より感謝申し上げます。

平成20年3月31日

雲仙市教育委員会  
教育長 鈴山勝利

# 例 言

- 1 本報告は平成18年度（2006年～2007年）に実施した古江地区県営圃場整備事業に伴う長崎県雲仙市瑞穂町に所在する伊古遺跡の発掘調査の報告（概報）である。
- 2 調査は雲仙市教育委員会が担当した。  
発掘調査は下記の期間実施した。  
2006年4月20日～2007年3月20日 伊古遺跡C区、D2区～D6区、E区、F区、G区、H区、I区
- 3 調査体制は次のとおりである。

調査主体	雲仙市教育委員会	教 育 長	鈴木 勝利
		教 育 次 長	辻 政実
		生涯学習課長	岩永 判二
		文化財班班長	柴崎 孝光
		主 査	辻田 直人
		文化財調査員	小野 綾夏
調査担当	同	主 査	江崎 亮太
		文化財調査員	山下 美郷・益田 豊明
- 4 現地での遺構・遺物の実測は進藤涼子・前田チイ・吉川 新・水谷安孝・東 文子・福田次郎・竹田将仁（別府大学）・益田・小野・山下・辻田・江崎が行い、遺物の実測は小野・山下が、トレースは早稲田一美が行った。また、図版の編集・作成は林田 崇・早稲田一美・小野・山下が行い、写真は現地調査を益田・小野・山下・辻田・江崎が、遺物写真は柳原亜矢子・小野が行った。裏表紙及び Abstract の英訳については生涯学習課 吉田奈央による。
- 5 遺構・遺物実測の一部は(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 6 自然科学分析は(株)古環境研究所に委託した。
- 7 空中写真撮影業務は(有)リモートセンシングスカイサーベイ九州に委託した。
- 8 本遺跡の遺物及び写真・図面等は雲仙市国見神代小路歴史文化公園歴史民俗資料館で保管している。
- 9 本書で用いた方位はすべて真北であり、国土座標は世界測地系による。
- 10 現地調査および本書の刊行にあたって多くの方々からご助言いただいた、記して謝意を表します。木本雅康（長崎外国語大学）、早田 勉（(株)古環境研究所）、本田秀樹（長崎北高等学校）、渡邊康行（(株)埋蔵文化財サポートシステム）、山口勝也（(株)埋蔵文化財サポートシステム）、瑞穂史談会、竹中哲朗（諫早市役所）、織田健吾（(株)扇精光）、(株)柴崎建設、(株)順宝建設、(株)富士建設（順不同）
- 11 本書の執筆・編集は山下美郷による。

# 目 次

巻頭図版

発行にあたって

例言

本文目次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 調査の経緯 ..... 1 p

第1節 発掘調査にいたる経緯

第2節 発掘調査の方法及び経過

第3節 遺跡の地理的・地形的環境

第2章 基本土層 ..... 5 p

第1節 各調査地点の対比

第3章 中世の遺構・遺物 ..... 8 p

第1節 道路状遺構

第2節 製鉄炉跡

第3節 竪穴状遺構

第4節 旧河川跡と出土遺物

第4章 総括 ..... 39 p

第1節 概要

第2節 まとめ

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図 (1/20,000)	
第2図	平成18年度までの調査区配置図 (1/1,500)	2
第3図	C区第1トレンチ基本土層図 (1/20)	5
第4図	D2区基本土層図 (1/20)	5
第5図	D6区基本土層図 (1/20)	7
第6図	E区道路状遺構検出状況 (1/200)	8
第7図	E区出土五輪塔配置図 (1/50、1/400)	9
第8図	E区水路遺構検出状況 (1/50)	10
第9図	E区出土土師質土器・坏 (1/20、1/3)	11
第10図	E区製鉄炉 (1/20)	12
第11図	D4区ST-1製鉄炉 (1/20)	13
第12図	D6区SK-2平面図・セクション図 (1/40)	14
第13図	D6区SK-6平面図・セクション図 (1/40)	15
第14図	D6区遺構配置図 (1/40・1/200)	16
第15図	D6区SX01平面図・セクション図 (1/20)	17
第16図	D6区SX03平面図・セクション図 (1/20)	18
第17図	D6区SX01出土土師質土器①・皿 (1/3)	19
第18図	D6区SX01出土土師質土器②・皿、坏 (1/3)	22
第19図	D6区SX01出土土師質土器③・坏 (1/3)	25
第20図	D6区SX01出土土師質土器④・坏 (1/3)	27
第21図	D6区SX03出土土師質土器①・皿 (1/3)	28
第22図	D6区SX03出土土師質土器②・坏 (1/3)	31
第23図	D6区旧河川跡出土土師質土器①・坏 (1/3)	32
第24図	D6区旧河川跡出土土師質土器②・坏、皿 (1/3)	34
第25図	C区・D区出土青磁碗 (1/3)	40

## 表 目 次

第1表	D6区出土土師質土器 (皿・坏) 観察表	36
第2表	E区出土土師質土器 (坏) 観察表	38

# 図 版 目 次

巻頭図版① 遺跡上空（D区）から有明海をのぞむ（南より）

D 6 区出土土師質土器（本文16頁～35頁）

D 6 区出土土師質土器（本文16頁～35頁）

巻頭図版② 遺跡（E区）上空写真（南東より）

D 6 区完掘状況（南より）

図版 1

遺跡上空写真（昭和35年度国土地理院）

D 6 区 SK-6 完掘状況（西より）

D 6 区旧河川跡遺物出土状況（西より）

D 6 区調査風景

図版 2

D 6 区上空写真（上が北）

D 6 区旧河川跡上空写真（上が南）

D 6 区 SK-2・6・7・8 上空写真（上が南）

E 区上空写真（上が北）

E 区道路状遺構上空写真（北半分）

E 区道路状遺構上空写真（南半分）

図版 5

D 6 区 SX01出土土師質土器（19頁第17図、22頁第18図）

図版 6

D 6 区 SX01・SX03出土土師質土器（22頁第18図、25頁第19図、27頁第20図、28頁第21図）

図版 3

D 4 区検出状況（北より）

D 4 区 ST-1 検出状況（西より）

D 4 区 ST-1 遺物出土状況（西より）

D 4 区 ST-1 完掘状況（西より）

E 区石組み土層断面状況（北より）

E 区石列・五輪塔出土状況（東より）

E 区製鉄炉出土状況（東より）

E 区遺物出土状況（東より）

図版 7

D 6 区 SX03・旧河川跡出土土師質土器（28頁第21図、31頁第22図、32頁第23図、34頁第24図）

E 区出土土師質土器（11頁第9図）

D 6 区出土土師質土器 皿

図版 8

D 6 区出土土師質土器 坏

C 区出土龍泉窯系青磁碗（40頁第25図）

D 4 区出土龍泉窯系青磁碗（40頁第25図）

D 4 区出土龍泉窯系青磁碗（40頁第25図）

D 2 区出土龍泉窯系青磁碗（40頁第25図）

D 4 区出土同安窯系青磁碗（40頁第25図）

D 2 区出土同安窯系青磁碗（40頁第25図）

図版 4

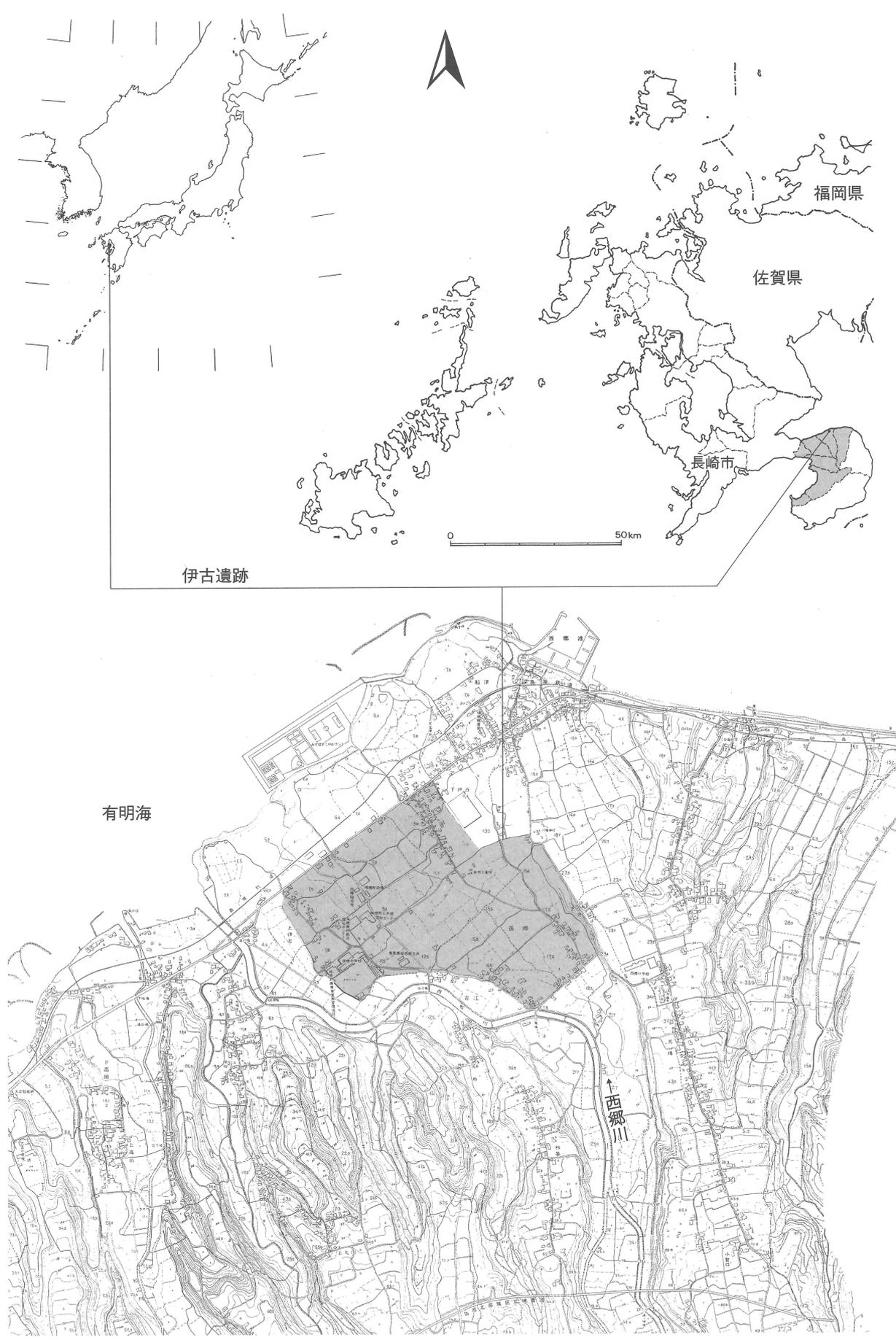
D 6 区遺構検出状況（北より）

D 6 区 SK-2 検出状況（西より）

D 6 区調査風景

D 6 区 SK-2 掘り下げ状況（北より）

D 6 区 SK-2 完掘状況（東より）



伊古遺跡

有明海

西郷川

第1図 遺跡位置図 (1/20,000)

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 発掘調査にいたる経緯

平成13年度に長崎県島原振興局より、古江地区県営圃場整備事業の計画があるとの紹介を受け、瑞穂町教育委員会（現雲仙市教育委員会）が主体となり、平成14・15年度に事業予定地内の遺跡範囲確認調査（試掘調査）を実施した。その結果、従来の周知遺跡である伊古遺跡をはるかに越える範囲で遺跡の発見が確認され、伊古遺跡の周知遺跡範囲は南東に広がりを見せることとなった。島原振興局・西郷土地改良区・瑞穂町教育委員会（現雲仙市教育委員会）による協議の結果、設計変更により遺跡の大部分は盛土により保存を行うこととなったが、遺跡の消滅する部分については発掘調査を行うこととなった。本調査は、平成17年度8月～平成20年度上半期の数ヶ月のおよそ3カ年にわたって実施する計画とし、今概報では、平成17・18年度の調査内容についてその一部を報告する。今回報告する調査は、道路および用排水路建設のために遺跡が破壊される部分について、長崎県島原振興局より委託を受けて行ったものである。

## 第2節 発掘調査の方法及び経過

### 試掘調査

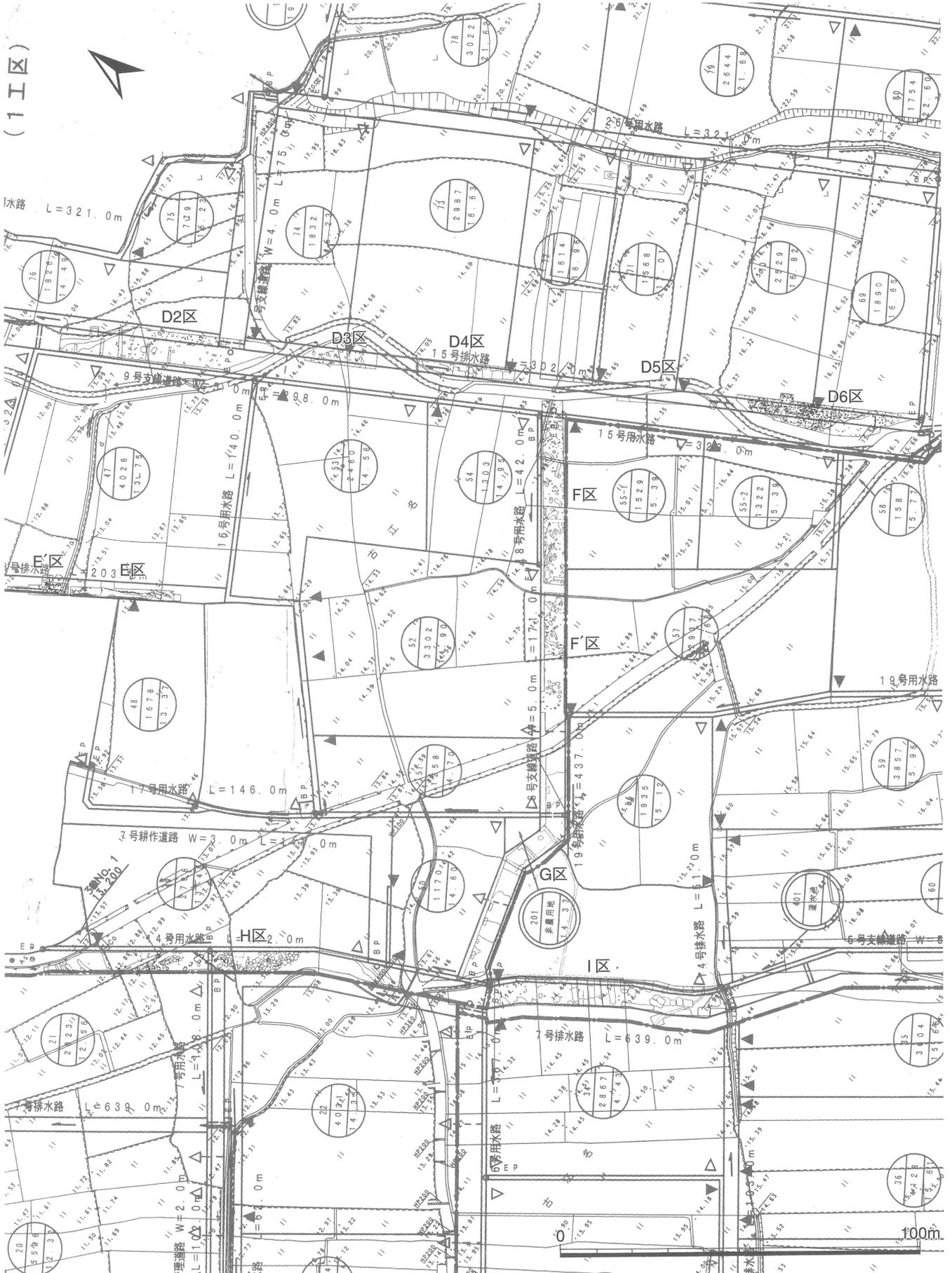
古江地区圃場整備予定地区内埋蔵文化財試掘及び範囲確認調査計画を受け、平成14年2月～平成15年6月までの約4ヶ月間、瑞穂町文化財保護協会が主体となり、瑞穂町伊古名池田・馬場・内浦、古江名中江・姥田・大宮田・前田・大坪、船津名久保の各地区が対象となり、試掘及び範囲確認調査が実施された。トレンチは124ヶ所設定（476m<sup>2</sup>）し、場所によって2m×2m、1m×4m、2m×2m+1m×2m、2m×2m+1m×1m+1m×1m、1m×10m、1m×4m+1m×2mとそれぞれ大きさが異なる。試掘調査の結果、一つ一つ状況は異なるが、全体として弥生時代～中世の遺構・遺物が出土するトレンチや、集石・畦畔・水田跡・かく乱をうけているトレンチが見受けられ、本調査における指標となるものであった。

### 本調査

本調査は世界測地系を使用し、道路・用排水路建設のために遺跡が消滅する範囲を調査対象範囲とし、20mもしくは4mメッシュに区切り、グリッド法によって行った。C区、D1区、D2区、D3区、D4区、D5区、D6区、E区、E'区、F区、F'区、G区、H区、I区を設定し、順次調査を実施した。遺構検出や遺物の取り上げは、その区ごとに行った。しかしながら、調査区の立地条件や遺構密度などにより、必ずしも20m、4mメッシュの調査区とはなっていない。また、本来の調査予定地以外の範囲についても、工事により遺跡の破壊される恐れがある部分や遺構が連続している部分に関しては、拡張し遺構確認（一部完掘）を行い、追加事業の農道建設部分についても、長崎県島原振興局、西郷土地改良区、雲仙市教育委員会による協議に基づいて範囲を拡張し、調査を行っている。

各調査区の表土は重機で掘削を行い、遺構確認面または遺物が出土する包含層から基盤層検出までは、人力によるものである。なお段階的に写真撮影をし、遺構・遺物を記録した。遺構実測図については平面図・断面図・土層図等、可能なかぎり実測図を作成した。遺物については、包含層や各遺構の遺物は一括で取り上げ、祭祀遺構や遺物残存が良いものについては可能な限り実測し、取り上げた。また、D2区の縄文時代草創期の遺物については、ドットマップを作成し取り上げを行っている。

今概報では、D4区、D6区、E区、E'区の中世の遺構・遺物の報告を行う。縄文時代草創期、弥生時代、古墳時代の遺構・遺物については、後日報告の機会を設ける。



第2図 平成18年度までの調査区配置図 (1/1,500)

### 第3節 遺跡の地理的・地形的環境

伊古遺跡は、長崎県の南部島原半島の北麓に位置し、霊峰雲仙岳を中心とした、緩やかに傾斜する火山性扇状に占地する。標高は14m～20mを測る。遺跡が存在する雲仙市瑞穂町の面積は27.36km<sup>2</sup>で、主な基幹産業は農業と漁業である。最近では、米・バレイショ・スイートコーン・イチゴ・メロン・温州みかん・カーネーション・あさりなどが特産品として、地域のまつりやフレッシュ朝市、ふれあい広場で行われる特産フェスティバルにおいて店頭に並んでいる。町おこしの行事としては、5月に開催されるモーモーフェスティバルや9月に長崎県ジャンボカボチャ大会が行われ、老若男女問わず賑わいを見せる。これまで島原半島の行政区画では、1市16町に分かれていたが、平成17年10月11日に国見町、瑞穂町、吾妻町、愛野町、千々石町、小浜町、南串山町と合併して雲仙市となった。

瑞穂町を含む北部地域では、火山性扇状地が発達し、肥沃な平野部と低丘陵地が大小の河川に沿って広がる。河川はいずれも有明海へと注いでいる。島原半島の中央部に、1990年（平成2年）の普賢岳（1359m）の噴火よりできた平成新山（1483m）を中心とした山岳地域があり、雲仙岳は火山地形と断層地形が目立っている。瑞穂町の場合、九千部火山地域に含まれ、雲仙岳の火山錘を横断する千々石断層の北部に広がる。九千部火山期に成立した火山丘として、鉢巻山（638m）、吾妻岳（868m）、鳥甲山（621m）がある。瑞穂町では山岳地域は南部の西郷川上流、等高線250m付近から急に傾斜を増している。標高507mの位置には、大峰（西郷山）がある。標高100m付近までは洪積層で表土の下には礫層がみられる。この標高域から海岸近くまでは、現在耕作地帯であるが、沖積層は河川が小規模なこともあって河口近くにわずかに認められる程度である。山麓の緩傾斜地は台地面を広く残しており、南北9kmに及ぶ町域の2/3にあたる6kmが台地で占められ、そこを10数基の谷と大小の河川が流れている。河川のなかで最も大きいのは、西郷川であり、大峰（西郷山）に源を発し、等高線300mの線に迫っている。支流の数も最も多く、県管理二級河川となっている。延長7634m、流域面積12.51km<sup>2</sup>、河川の水温は上流で低く15度程度、下流で20度以上になっている。西郷川を除いた河川はいずれも短小で、松江川と船津川のほかは支流さえ欠いている。河川が流れつく有明海は潮汐差6.6mに達する内湾で、干潮時には干潟が現れる。熊本県の三角半島北岸から福岡県、佐賀県を経て諫早湾に至る海岸に分布しているが、有明海の潮汐と河川の堆積作用により沿岸平野と干潟が形成されたといわれている。旧海岸線は現在の5～6km位内側にあるとされ、白川・緑川・六角川・本明川・菊池川・筑後川等の河川による多量の土砂が供給され「ヘドロ」の堆積が進み干潟の発達が見られたと考えられる。瑞穂町にはこの種の干潟は分布せず、海岸は雲仙岳火山裾野の末端で単調な火山海岸地形をなし、河川の土砂供給は非常に少なく、集塊岩の堆積であるため円礫がみられ、粗砂によって砂丘の発達があったとされている。最近では諫早湾干拓事業が進み、吾妻町と高来町を結ぶ堤防道路が完成し、観光や物流、市民の生活幹線道路としての利用がみられる。

伊古遺跡の周知遺跡範囲の南東には試掘調査後に行われた確認調査で、西郷小学校近辺に中世の城跡である下田遺跡が発見されている。南には中世の有馬の家臣進藤権太夫の居城跡である杉峰城跡が立地する。東には栗林名に神代城の支城と考えられる尻無城跡（古城）がある。神代城は正和元年（1312年）以前に神代式部大輔貴益が築いたとされているが、実際には鎌倉期には居を構えていたと考えられ、これまでに発掘調査等は行われておらず、年代の裏付けとされることなく資料的根拠に基づく解釈がなされていた。だが、尻無城跡の発掘調査によって、遺構・遺物ともに14世紀前後もしくは14世紀以降のものが確認され、神代城の支城と考えて差し支えないことが明らかとなっている。その他、近年の開発によって発掘調査が行われた柿ノ本古墳（岡名）、陣ノ内遺跡（岡名）、京ノ坪遺跡（高田名）は、伊古遺跡の西に位置し弥生時代・古墳時代を中心とする遺跡が存在する。

今回報告する中世の遺構・遺物が出土した地点は、現在まで使用されていた用排水溝に沿って検出された旧河川跡に位置している、かろうじて水田造成時の削平は受けておらず、遺構・遺物が顕著に出土しているが、縄文・弥生・古代の遺構・遺物も少なからず出土している。周囲の立地的にも人が生活しやすい環境であったことが窺える。

伊古遺跡の北側約150mは海岸線になっており、国道57号線と島原鉄道が並行して東西に走っている。西は諫早方向、東は島原方向、遺跡に最も近い島原鉄道駅は「西郷（さいごう）」、島原鉄道バスの停留所は「伊古」、「西郷駅前」である。

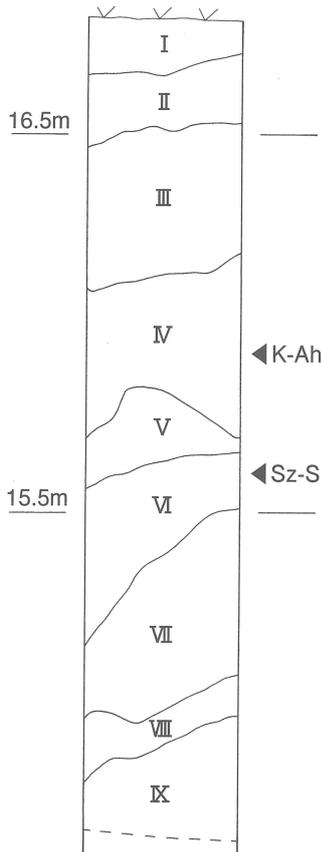
#### 【参考文献】

- 瑞穂町 1988『瑞穂町誌』長崎県瑞穂町  
国見町 1984『国見町郷土誌』長崎県国見町  
久原卷二 1994「第2章 地理的歴史的環境 I 地理的環境」『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』（田川 肇編）長崎県文化財調査報告書 第116集  
長崎県教育委員会  
安楽 勉 1991「Ⅱ遺跡の歴史的地理的位置」『尻無城跡』長崎県瑞穂町文化財保護協会  
町田利幸 1994「Ⅰ調査に至る経緯」『京ノ坪遺跡』瑞穂町文化財保護協会調査報告書 第2集  
長崎県瑞穂町教育委員会  
正林 護・永嶋 豊 1998「陣ノ内遺跡の位置と地理的環境」『陣ノ内遺跡』  
瑞穂町文化財調査報告書 第3集 長崎県瑞穂町教育委員会  
辻田直人・竹中哲朗 2003『石原遺跡・矢房遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第3集  
長崎県国見町教育委員会  
辻田直人・竹中哲朗 2004『十園遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第4集 長崎県国見町教育委員会  
辻田直人・竹中哲朗 2005『十園遺跡Ⅱ』国見町文化財調査報告書（概報）第5集  
長崎県国見町教育委員会  
辻田直人 2005『石原遺跡Ⅱ』国見町文化財調査報告書（概報）第6集 長崎県国見町教育委員会  
竹中哲朗・織田健吾 2006『龍王遺跡（倉地川古墳）』雲仙市文化財調査報告書（概報）第1集  
長崎県雲仙市教育委員会  
辻田直人 2007『龍王遺跡Ⅱ・真正寺条里跡（旧石器時代編）』雲仙市文化財調査報告（概報）第2集  
長崎県雲仙市教育委員会

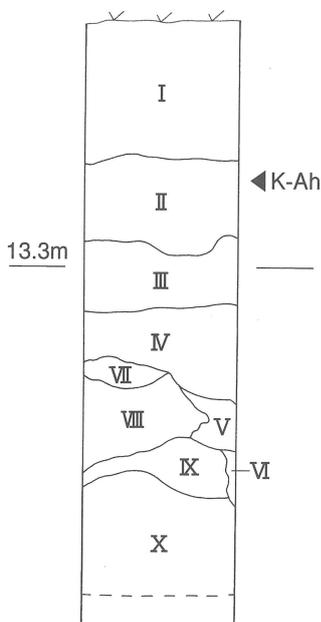


伊古遺跡発掘調査集合写真

## 第2章 基本土層



第3図 C区第1トレンチ基本土層図 (1/20)



第4図 D2区基本土層図 (1/20)

### 第1節 各調査地点の対比 (第3図～第5図)

伊古遺跡の土層堆積は、一面に同様であるが、調査区ごとに異なり、部分的に欠落している層がある。また調査区の多くが、最近まで使用されていた水路や溝、石垣が存在しており、全体的にかなり削平を受けている。ここでは中世と縄文時代が複合している調査区と、中世の最も残りの良い、C区、D2区、D6区の土層堆積状況を記載する。

C区、D2区では自然科学分析の火山灰分析や植物珪酸体分析を実施しており、検出された火山灰堆積状況のデータは信頼性の高いものと考えられる。※今概報では自然化学分析データは未掲載。

#### C区第1トレンチ基本土層 (第3図)

第I層：水田耕作土。

第II層：旧水田耕作土及び客土。

第III層：黒褐色土層 (7.5YR3/1) 植栽痕と思われる痕跡がある。層の中心より東側は茶褐色土が主体である。

第IV層：にぶい赤褐色土層 (5YR4/4) 粘性が高く、締りがよい。層の中心はやや黄褐色土である。径5～20cm程の礫を中量に含む。縄文時代早期と考えられる。(約6300年前(暦年較正年代7300年前)に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)に由来する火山ガラス質テフラが検出されている。)

第V層：褐灰色土層 (7.5YR4/1) 粘性があり、締りがよい。VI層とVI層が混合したような色調である。

第VI層：黒色土層 (7.5YR2/1) 粘性が高く、締りがよい。径10～30cm程の礫を中量に含む。細石器が検出され、縄文時代草創期と考えられる。(約1.1万年前(暦年較正年代約1.28万年前)に桜島火山から噴出した桜島薩摩テフラ(Sz-S)に由来する火山ガラスが検出されている。)

第VII層：にぶい褐色土層 (7.5YR5/4) 粘性がややあり、締りがよい。径5cm程の礫を若干含む。VI層の影響を受け、層の西側の下層はやや灰褐色土である。

第VIII層：黄褐色土層 (10YR5/6) 粘性があり、締りがよい。径10～35cm程の礫を多量に含む。黒色・白色粒子を多量に含んだ黄褐色ブロック土を中量に含む。

第IX層：黄橙色土層 (10YR6/3) 粘性が高く、締りがよい。黄黒色粘質土ブロック若干含む。遺物がなく、混ざりけがないため、地山と考えられる。

## D 2区基本土層 (第4図)

第I層：旧耕作土。

第II層：黒色土層 (2.5YR2/1) 粘性がややあり、締りがよい。径0.1~1 cmの黄色・白灰色・黄白色の粒子を微量に含む。縄文時代早期と考えられる。(約6300年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) に由来する火山ガラスが混在していると考えられる。)

第III層：暗褐色土層 (10YR3/4) 粘性があり、締りがややあまい。II層とIV層の影響を受けている色調である。細石刃包含層である。

第IV層：暗褐色土層 (7.5YR3/3) 粘性がややあり、締りややあまい。砂を少量含む。始良 Tn 火山灰が検出されている

第V層：黒褐色土層 (7.5YR3/2) 粘性があり、締りがあまい。特に混入しているものはない。

第VI層：にぶい黄褐色砂質土層 (10YR4/3) 粘性がややあり、締りがよい。やや砂質土である。

第VII層：暗褐色砂質土層 (7.5YR3/4) 粘性がややあり、締りが非常によい。

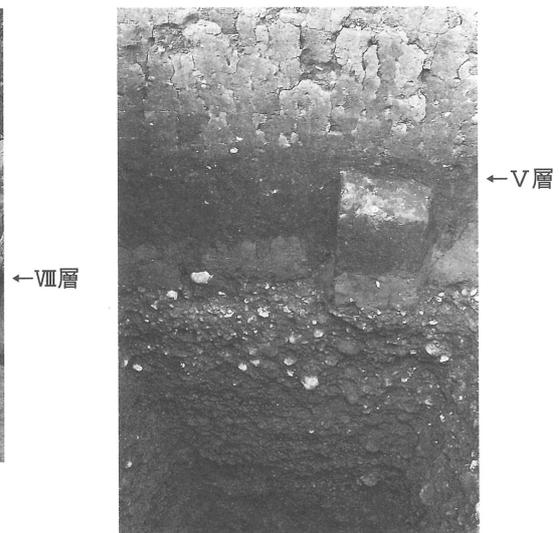
第VIII層：黒褐色土層 (7.5YR2/2) 粘性がややあり、締りが非常によい。径0.1~1 cmの青白・赤白色粒子を微量に含む。黄褐色土が斑に混在している。

第IX層：黒褐色砂質土層 (7.5YR3/1) 粘性があまりなく、締りがよい。砂を多量に含み、径0.1~0.2 cmの白灰色粒子を僅かに含む。

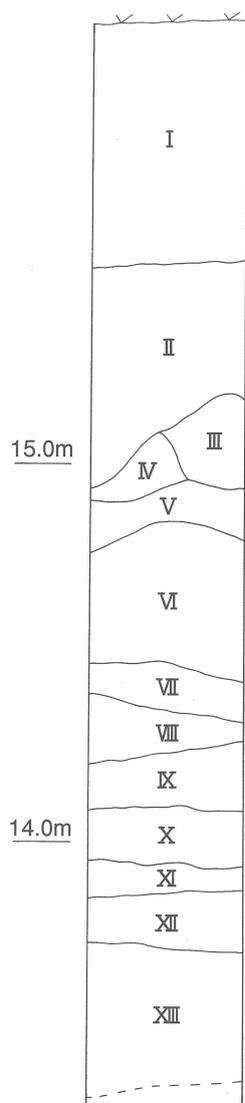
第X層：暗褐色砂土層 (10YR3/3) 粘性はなく、締りがよい。径0.1~1 cmの粒子の砂層である。



D 2区土層堆積状況 (遠景)



D 6区土層断面



第5図 D6区  
基本土層図 (1/20)

### D6区北側トレンチ基本土層 (第5図)

第I層：水田耕作土。

第II層：黒褐色土層 (5YR2/1) 粘性が若干あり、締りがややあまい。  
中世の遺物 (青磁・白磁・土師器・播鉢・石鍋・瓦器碗など) を多く混入する河川堆積である。

第III層：にぶい褐色土層 (10YR5/4) 粘性がややあり、締りがよい。径2～3cmの礫を僅かに含む。遺物がほとんどなく、ブロック状の塊となっていることにより、河川堆積の底と考えられる。

第IV層：にぶい橙色土層 (7.5YR6/4) 粘性ほとんどなく、締りがよい。径0.5～1cmの礫を若干含む。遺物がほとんどなく、ブロック状に堆積していることにより、III層と同じく河川堆積の底と考えられる。しかし、色調がやや黄白色気味で、マンガンブロックを僅かに含む。

第V層：褐色砂質土層 (7.5YR4/3) 粘性ほとんどなく、締りがよいが、礫が多いため崩れやすい。径1～10cm程の砂や砂利石を多量に含む。遺物なし。

第VI層：暗赤褐色砂質土 (5YR3/6) 粘性はなく、締りはよいが、やや砂利を含むので、砂混じりの層である。径5～15cm程の礫を多量に含む。鉄分・マンガンブロックを若干含む。遺物なし。

第VII層：灰褐色砂質土層 (7.5YR5/2) 粘性はなく、締りがよい。砂混じりの層である。径3～5cm程の礫を中量に含む。遺物なし。

第VIII層：にぶい赤褐色礫層 (2.5YR4/3) 粘性僅かにあり、締りがよい。径2～5cmの礫を多量に含む。遺物なし。

第IX層：にぶい褐色砂質土層 (7.5YR5/4) 粘性ほとんどなく、締りがよい。径3～8cm程の礫を中量に含む。砂利層である。遺物なし。

第X層：にぶい赤褐色土層 (2.5YR4/3) 粘性が若干あり、締りがよい。径2～5cm程の礫を多量に含む。遺物なし。

第XI層：にぶい褐色土層 (7.5YR5/4) 粘性はなく、締りがよい。砂利層である。径3～8cm程の礫を中量に含む。遺物なし。

第XII層：にぶい赤褐色土層 (2.5YR4/3) 粘性僅かにあり、締りがよい。砂利層である。径0.5～5cm程の礫を多量に含む。遺物なし。

第XIII層：褐色土層 (7.5YR4/4) 粘性はなく、締りがよいが、砂利層なので崩れやすい。径1～8cmの礫を多量に含む。遺物なし。

※トレンチ下層では、にぶい褐色粒子の小～大までの砂利層と粘性がある土がついたにぶい赤褐色礫層が交互に堆積している。

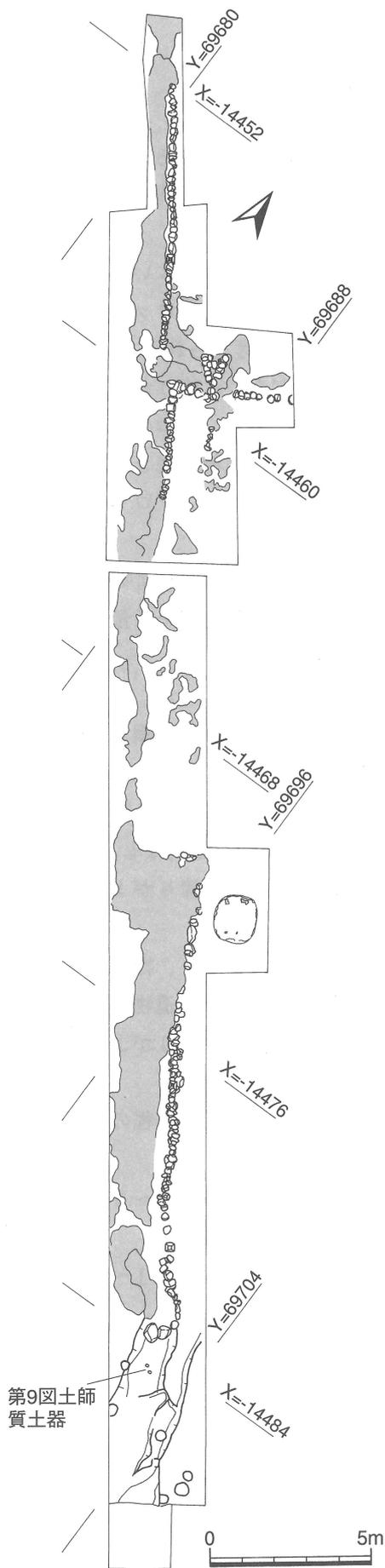
#### 【参考文献】

小山正忠・竹原秀雄 2002. 2『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社

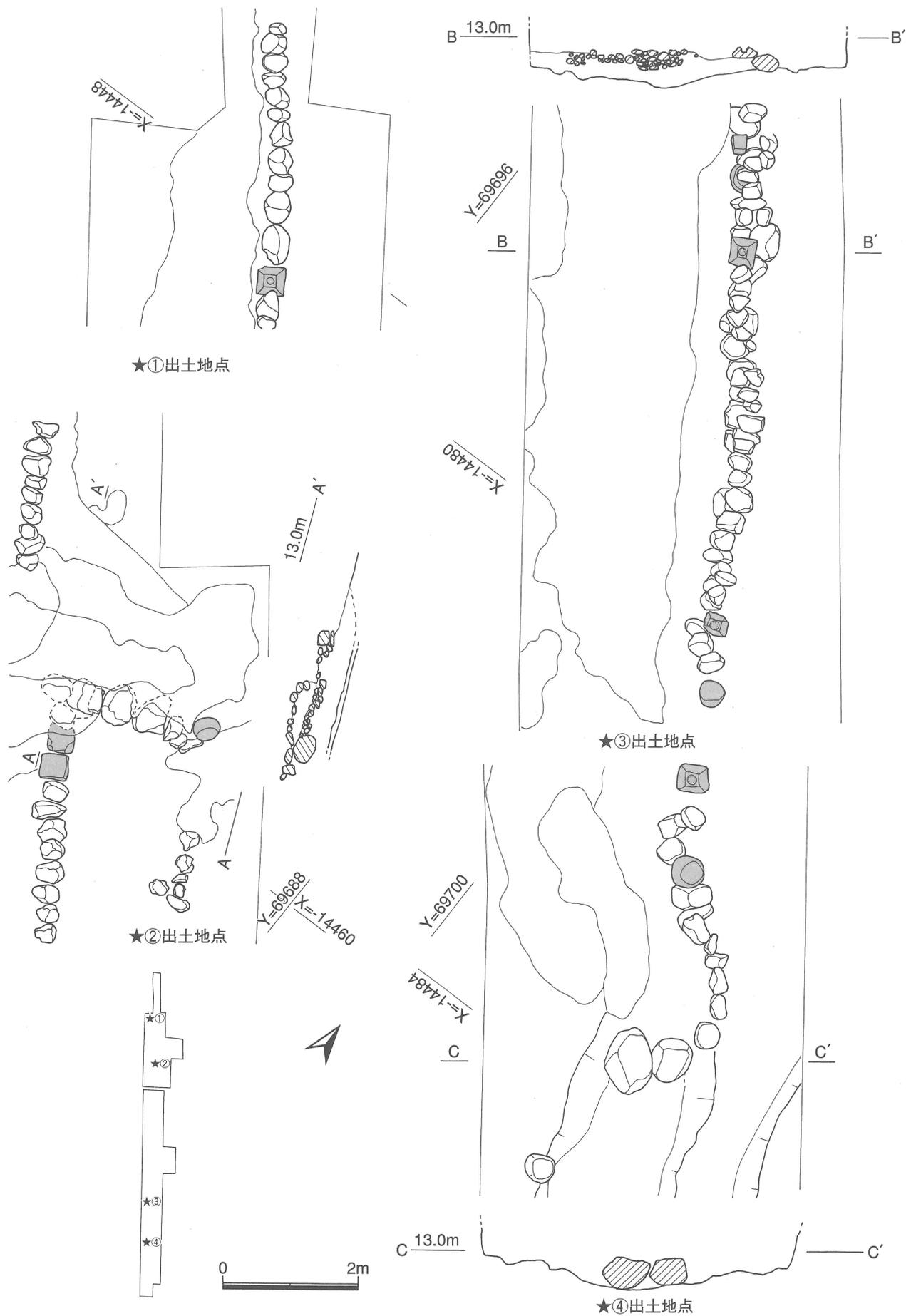
### 第3章 中世の遺構・遺物

#### 第1節 道路状遺構 (第6図)

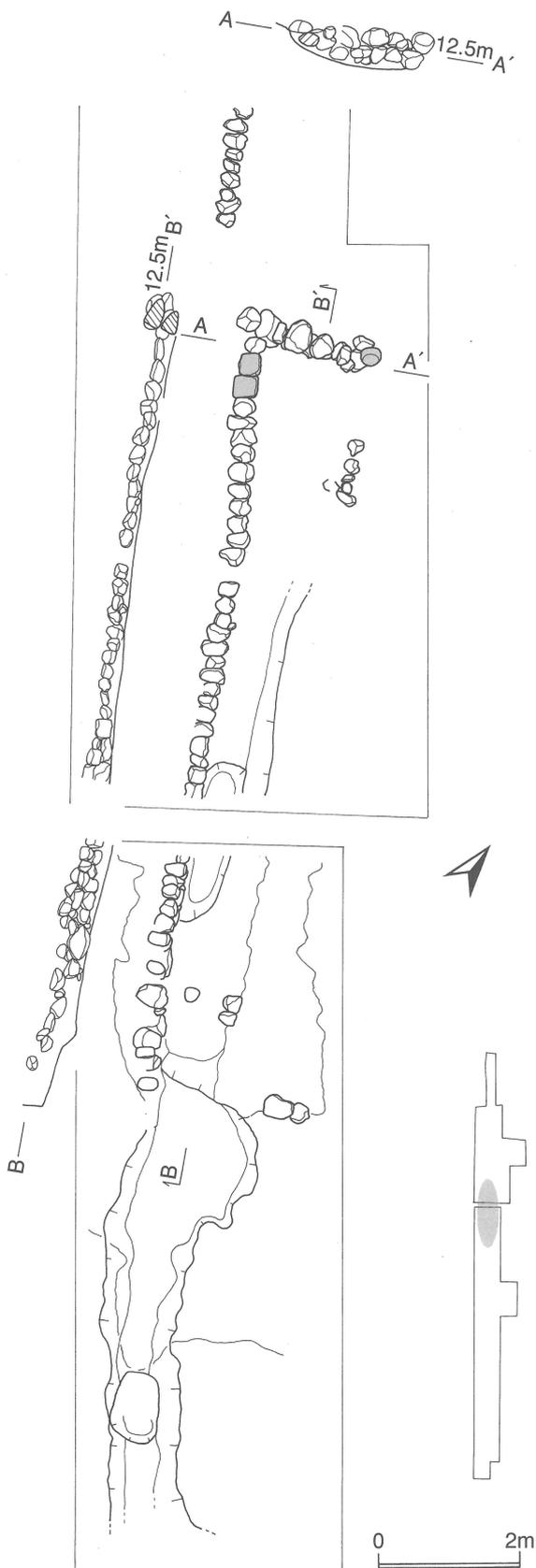
伊古遺跡E区、E'区から長さおよそ78m、幅5.5mの道路状遺構が検出された。遺構は中世の遺物包含層より下の層から確認されており、土師器・石鍋・青磁・白磁・鉄滓などが多く出土している。また道路状遺構とはいっても整地層や側溝を伴っておらず、石列や石組を敷き詰めており、何らかの基礎としていたのであろう。石組は南北を横断するようにトレンチを入れて確認を行った所、15~20cm大の礫が東側道路沿いにそって南北ほぼ直線的に並び、その下は20cm~1mほどの厚さで礫が堆積している。またその直線的に並んでいる石列の西側には、5~10cm大の礫が道路幅と思われる範囲一面に密集して敷き詰まっている。堆積は厚さ15cm~1mほどである。調査区を南へいくほうにつれて、配石は浅くなっていることがトレンチをいれて確認されている。東側道路沿いに一列に並ぶ石の中には、役目を終え廃棄されたもしくは石材不足のためか五輪塔が含まれている。確認できた五輪塔の種類としては、地輪・火輪・水輪の三種類が出土している。道路の区画においても、北と南では、敷き詰められている石の道路幅が違う。北は南のおよそ半分ほど狭い道幅となっている。また、道路が狭くなる側の東側中間部分には、溝のようにくぼんだ水路遺構が検出されている。道路状遺構を南北の軸として東側に延びる石列が北側に一列みられる。南側の道路が終着あるいは屈曲する部分には、道路面下部に歯止めの様な規格のひとまわり大きい石が2個出土しており、その付近には、完形品の土師器が2点出土している。2点とも内面が上を向いており、同じレベルの出土状況から、道路が構築された際の祭祀的な供献具ではないかと考えられる。道路が広がる部分の東側に、後ほど取り上げる製鉄炉跡(第2節)が出土しており、(当初は一部分しか検出されなかった為、後日調査区拡張を行う)道路が使用されていた時期との関係がうかがわれる。今回のような石敷の道路状遺構の検出は各地にみられるが、それらは、道路状遺構と並行した側溝を備えたり、溝または溝状の落ちこみに敷石や配石をおこなったりする例がある。県内では、松浦市の楼楷田遺跡において、長さ100m以上、幅1.2m、厚さ50cmの規模で、溝状あるいは柵跡などの遺構は検出されていないものの、両側に大きな自然石を配置した後に小礫を間に埋めこむという構築方法をおこなっている。また南有馬町(現南島原市)の今福遺跡Ⅲにおいて、東西長軸両側を比較的大型の40cm前後の礫で囲み、その中の拳大の礫が覆う形で、大型の礫の下には小礫を積み重ね、安定感を持たせている石敷遺構が検出されている。当遺跡で検出されたものについては、途切れている水路遺構が検出されたが、道路状遺構の片側面が確認されたのみで、もう側面は調査範囲外



第6図 E区道路状遺構検出状況 (1/200)



第7図 E区出土五輪塔配置図 (1/50、1/400)



第8図 E区水路遺構検出状況 (1/50)

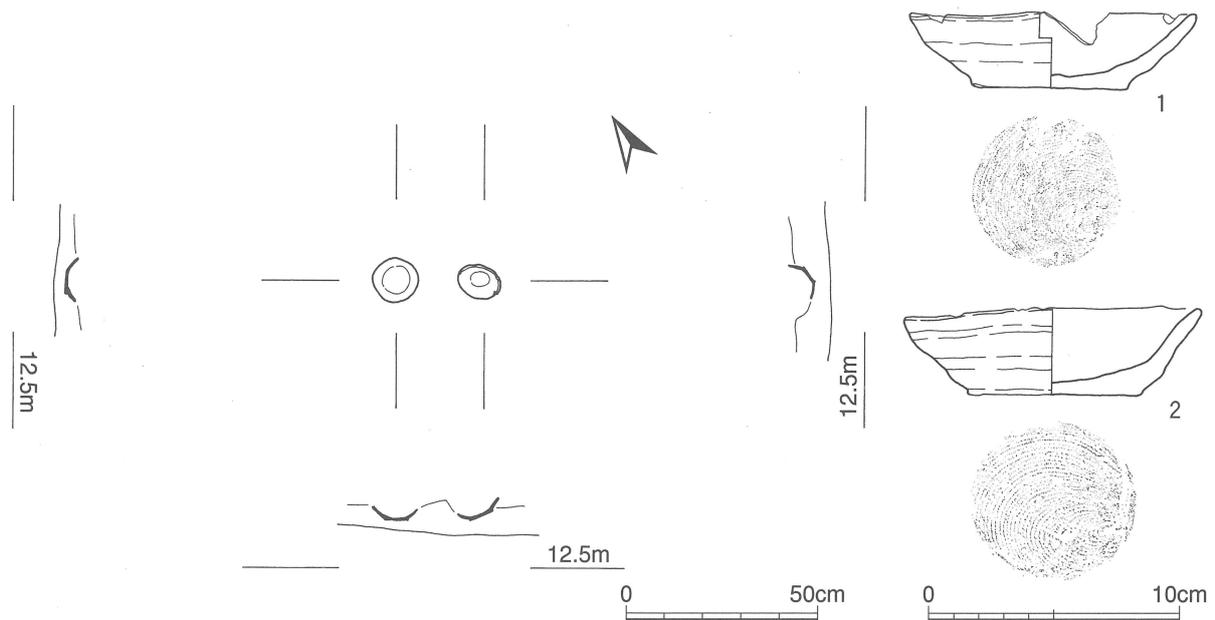
であったため、水路遺構と道路状遺構との関連は明確にされていない。そして、調査区北西には、建立年1760年よりさかのぼる（瑞穂町誌、1760（宝暦10）年の神代鍋島家文書「日記」に伊古熊野神社の記載あり）伊古の熊野神社が今なお存在しており、道路状遺構は神社に対して直交するのではなく、むしろ平行している様である。熊野神社が建立される以前に使用されていたのだろうか、もしくは道路状遺構の南北の軸は、有明海を向いており、海とのつながりが強いことや、海から特別な施設へ向う回廊的な意識も働いていたことも示唆できるが、その用途は明らかではない。

#### 五輪塔について (第7図)

道路状遺構を形成していく石列の中で、およそ4ヶ所に五輪塔の集中箇所を確認できた。その出土状態は石列の石材の一つとして五輪塔を再利用しているもので、出土した場所はそれぞれ離れ、特別まとめて出土していたり、意図的に据えたりはしていない。なかには、小礫や中礫の下に組まれ、石組みの土台となる部分もあり、火輪（三角）を観察すると、破損や磨耗が著しく、やはり一定期間、五輪塔を墓石・墓標・供養塔として用いたのち、二次利用された可能性が高いと考えられる。数は、地輪（方形）3点、水輪（円形）4点、火輪（三角）5点の12点である。

#### 水路遺構について (第8図)

小路や大路、官道といった大がかりな道路には、必ず側溝や溝も道路と伴って検出されることが多い。伊古遺跡E区、E'区の道路状遺構は、路面に整地層はなく、側溝もみられないが、道路状に石列、石組列が、5cm~40cmの礫を敷きつめて並んでおり、現代の圃場地割でコンクリ石垣が調査区を分断している場所付近において、道路状遺構東側際に、長さ10.7m、幅65cm~1.4m程、深さ5cm~20cm程の水路跡のような遺構が検出された。水路遺構は、途中で途切れるものであり、また2基の土坑が水路下より検出されている。部分的にしか出現していない水路遺構は一見して道路状遺構とは伴っていないようである。しかし、水が流れた方向が道路に沿っており、長い間使用されていたようには見えないが、ある期間一時的に水路としての機能を果たしていたか、水路を埋めて道路を構築したかと思われる。



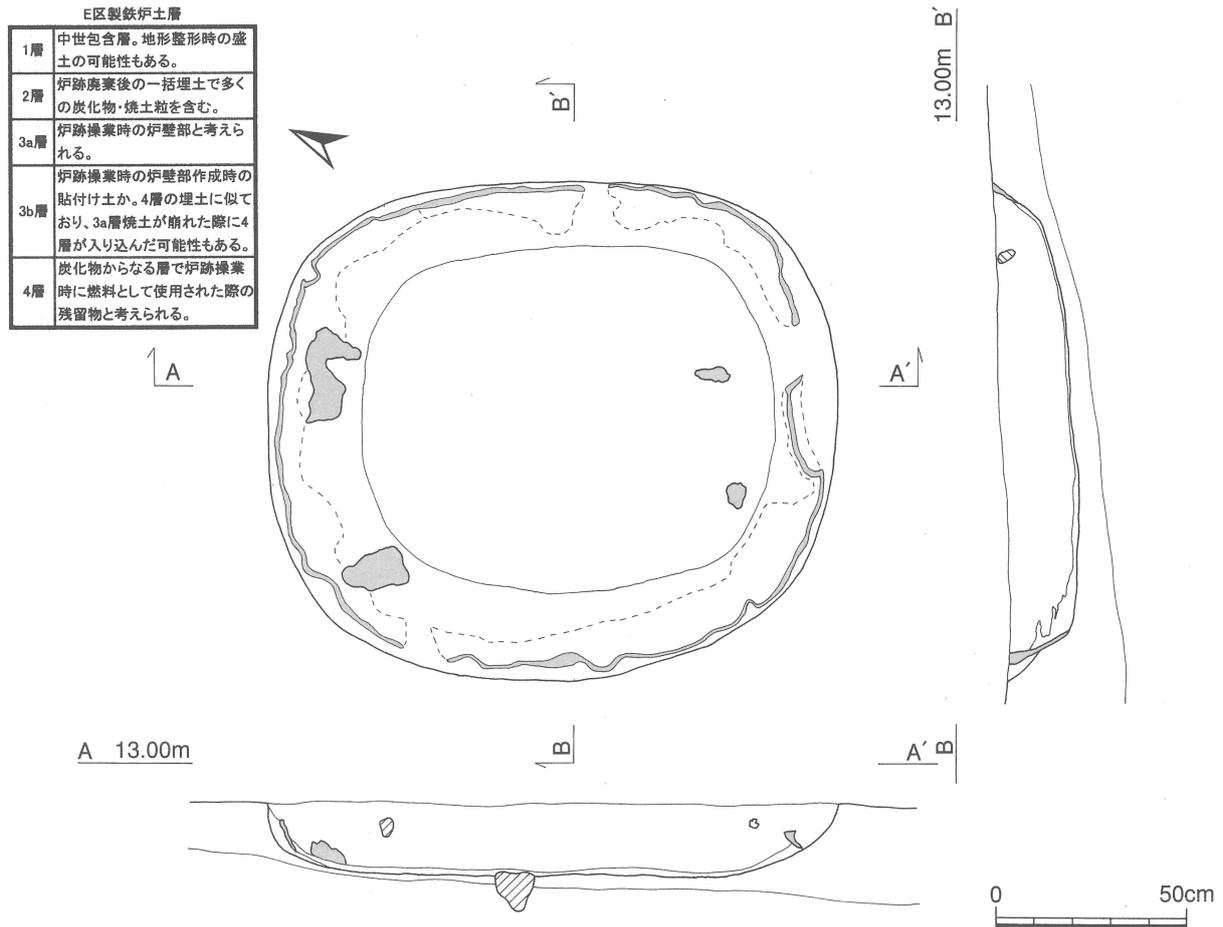
第9図 E区出土土師質土器・坏（1/20、1/3）

#### 道路状遺構出土遺物（第9図）

道路状遺構の南端付近（第6図に示す）において、完形品にちかい土師質土器の坏が2点出土している。以下、出土遺物について紹介する。1は口径11.2cm、器高3cm、底径6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部から外湾→内湾→外湾する。底部外面に回転を利用した糸切り離しを施す。色調は内面ににぶい褐色、外面に橙色、黒色を成す。意図的に打ち欠いたと思われる所が、口縁端部に3ヶ所みられる。2は口径11.6cm、器高3.4cm、底径6.6cm。内面底部に回転利用の横ナデ調整を施し、内面口縁部に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部から外湾→内湾→外湾→外湾する。底部外面は回転を利用した糸切り離しを施す。色調は内面ににぶい黄橙色、外面ににぶい黄橙色、黒色を成す。2点ともほぼ完形品であり、同一形態・技法で形成されている。道路状遺構の規格の大きい2個の石と隣接し、同じ数量、ほぼ同じレベルで出土している事は、道路を構築する際に何らかの祭祀を行っている可能性が高いと考えられる。また調査区全体からも遺物が多数出土しており、道路構築年代を導き出す良好な資料となっているが、本概報ではそこまで整理できなかった。今後、整理を進めたいので、稿を改めて報告していきたい。

#### 【参考文献】

- 福田一志 1985「IV歴史時代 1中世の遺構（1）石敷道路状遺構」『倭櫛田遺跡』（安楽 勉・中田敦之編）  
長崎県文化財調査報告書 第76集 長崎県教育委員会・松浦市教育委員会
- 町田利幸 1986「II遺構 2中世の遺構（10）道路状遺構」『今福遺跡Ⅲ』（町田利幸・宮崎貴夫編）  
長崎県文化財調査報告書 第84集 長崎県教育委員会
- 山村信榮 1993「大宰府周辺の道路状遺構」『古代交通研究 第2号』 古代交通研究会



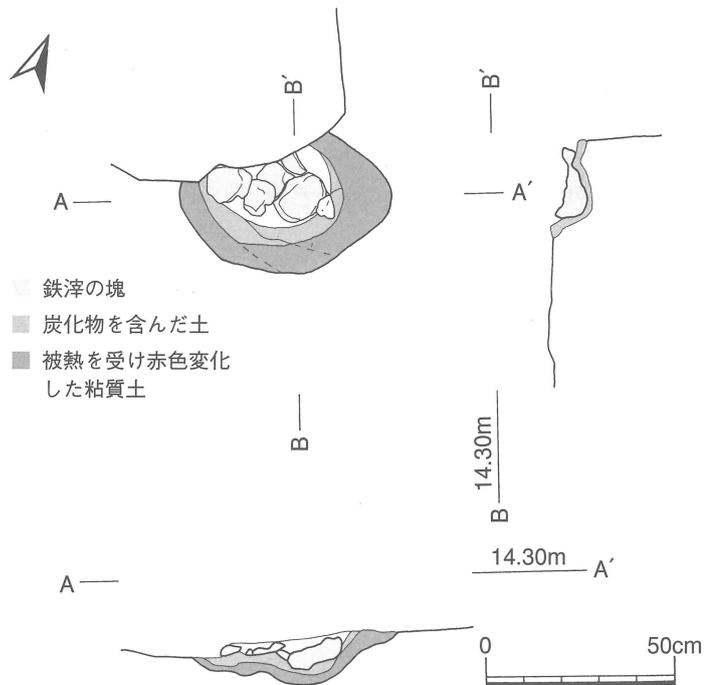
第10図 E区製鉄炉 (1/20)

## 第2節 製鉄炉跡 (第10・11図)

D4区及びE区より製鉄関連遺構が検出されている。2ヶ所は、雲仙岳山麓より延びる丘陵崖下の調査区と、水田地帯が広がる扇状地上に位置する調査区と、多少場所が離れている地点からの検出である。D4区での遺構検出は、これまでの造成・耕作による削平により、遺構の1/3は攪乱による崩壊がみられた。E区の検出は、耕作による中世土層の削平が一部みうけられるものの、遺構自体は良好に残っていた。D4区付近の調査区では、多量の遺物を含んだ旧河川跡が検出されており、その中にも鉄滓や鉄塊系遺物や鞆羽口片が出土している。またE区にも鉄滓や鞆羽口片の出土が確認されている。ゆえに、周囲の広がりや遺物の出土量からも、大規模な製鉄関連遺構が展開している事が想定できる。しかし、遺構として確認できたのは、この2ヶ所のみで、今後新たな発見が期待されることである。また、旧河川跡には、青磁・白磁・石鍋・瓦器碗といった、中世を代表する遺物が共伴して出土している。このことは、製鉄関連事業が中世をピークに操業していた事に由来し、さらに詳しい年代を解く鍵になると考えられるが、今回はそこまでの整理には至っておらず、今後慎重に検討すべき課題といえる。また、D4区とE区の出土遺物の年代はほぼ中世にあたり、同時期に製鉄が盛んに行われていた事が示唆できる。以下、炉本体の残存が良好なE区の製鉄炉とD4区の製鉄炉及び製鉄関連遺構について説明をする。

**D4区：**D4区では、調査区南側において、製鉄炉1基 (ST-1) と製鉄関連遺構2基 (ST-2、ST-3) が検出された。調査区は最近まで利用されていた農道や水路溝、耕作土による削平をうけており、検出された炉跡 (ST-1) や製鉄関連遺構 (ST-3) も一部攪乱による欠落がみられる。ST-1の炉跡

検出プランは、楕円形を呈しており、炉本体の下部構造と考えられる。大きさは、長軸55cm、短軸約40cm、深さ13cmである。炉跡の中には、焼土を含み、被熱を受け赤色化した粘質土を充填した上部に炭化物を多く含んだ土が薄く敷かれ、その中に溶解した鉄滓の塊が中心部に出土している。溶解した鉄滓は、炉底に癒着した炉底滓と考えられ、製鉄炉として認識することができた。ST-2とST-3は製鉄関連遺構と思われる。ST-2は楕円形で、大きさは、長軸70cm、短軸66cm、深さ7cmであり、中心部は黄色土で、周りに炭化物を含んだ黒色土を有する。炉跡が近くに存在し、炭を精製もしくは、炭かすを廃棄した土坑かと考えられる。ST-3は楕円形で、大きさは、長軸86cm、短軸



第11図 D4区 ST-1 製鉄炉 (1/20)

約47cm、深さ9cmであり、遺構の中に鞆羽口片、鉄滓、礫を含み、廃滓場としての利用が想定される。前述したように今回は遺構のみの報告で、出土遺物については報告していない。今後機会を設けて報告していきたい。

**E区**：E区では、調査区南側に位置する拡張した部分（第10図）より、製鉄炉が検出された。炉跡検出プランは、円形あるいはやや楕円形であり、大きさは、長軸1.5m、短軸1.33m、深さ20cmである。当初の掘削面は中世の遺物を包含した層であり、炉本体がフラットになるように素掘りをして構築している（1層）。炉内部の覆土は、2～4層で、レンズ状に堆積している。2層は炉廃棄後に一括で埋土されており、多くの炭化物・焼土を含む。3 a層は炉跡操業時の炉壁部であろう、焼土が硬化している。3 b層は炉跡操業時の炉壁部作成時に貼り付けられた粘土のようであるが、4層の埋土と類似しており、3 a層が崩れた際に4層と混ざった可能性もある。4層は炭化物からなる層で、燃料として使用された時の炭の残留物と思われる。九州地方の中世初頭の製鉄炉は、踏みフイゴを伴う半地下式型炉が一般的だが、隣接する同町の京ノ坪遺跡では、卵形を呈する形状で自立炉である。また国見町石原遺跡・矢房遺跡では、円形と長楕円形の製鉄炉と検出状況が半分であるが、作業面が高低する段差を利用して、送風座や廃滓場としての構造を確認した製鉄炉の2基を検出しており、国見町十園遺跡では、中国地方の技術を基本とした、長方形箱型炉を検出している。今回、E区で検出された円形あるいはやや楕円形の製鉄炉はD4区や京ノ坪遺跡の炉と同じく炉本体が自立しており、木炭窯や排滓口、廃滓場、フイゴ座（送風座）、鍛冶炉、前庭部などの作業的な遺構が確認されなかった点が、多少疑問に感じるが、新たな発見による類例を得て、この地方における製鉄炉の機能や性格が位置付けされることを期待する。

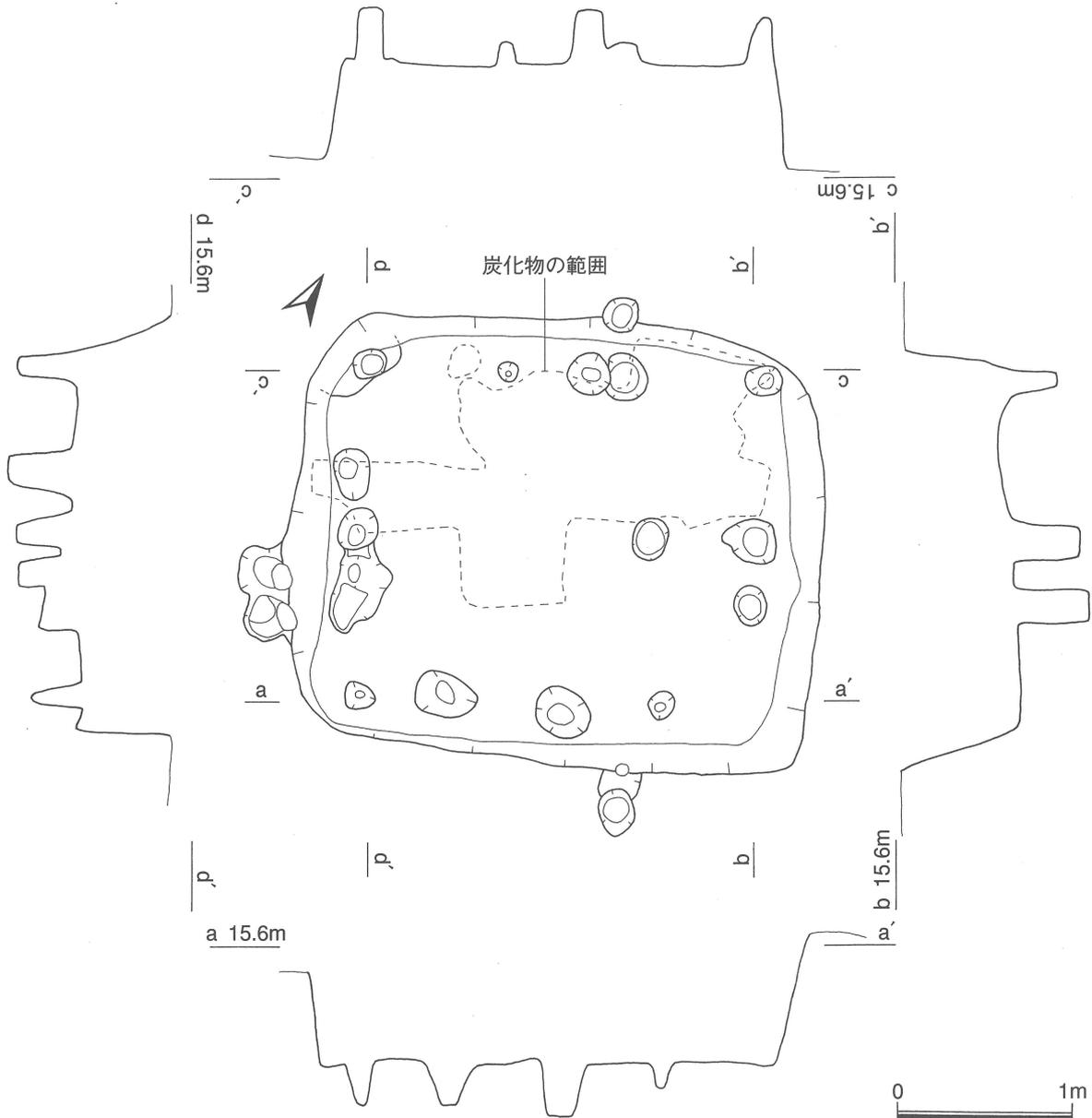
#### 【参考文献】

- 町田利幸 1994『京ノ坪遺跡』瑞穂町文化財保護協会調査報告書 第2集 長崎県瑞穂町文化財保護協会  
 辻田直人・竹中哲朗 2003『石原遺跡・矢房遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第3集  
 長崎県国見町教育委員会  
 辻田直人・竹中哲朗 2004『十園遺跡』国見町文化財調査報告書（概報）第4集 長崎県国見町教育委員会

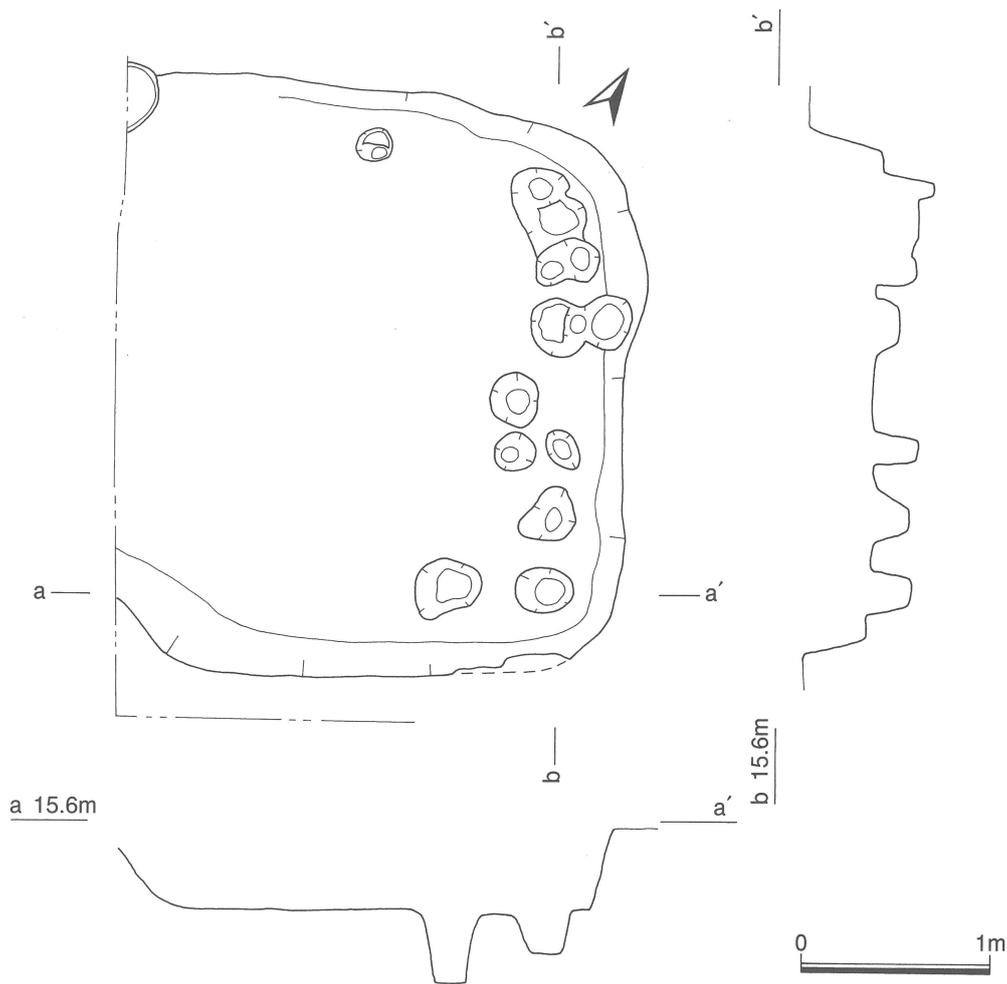
### 第3節 竪穴状遺構

伊古遺跡D6区はおおむね中世の遺構・遺物が多数出土している調査区であり、遺構のなかでも調査区北側東西に竪穴状遺構が4基検出された(第14図)。SK-2、SK-6の2基は方形プランを成し、残存壁高はSK-2が約60~80cm、SK-6が約30~40cmであるのに対し、SK-7、SK-8は楕円形土坑であり、残存壁高が約15~20cmと浅く、不明遺構である。ここでは、竪穴状遺構のSK-2とSK-6の2基について記述する。

**SK-2** : D6区で確認されたSK-2(第12図)は、方形プランで、床面積7.68㎡を測り、長軸3.07m、短軸2.50mである。床面周縁に15基の柱穴を配置する。SK-2内部の北西部分の壁面周縁に炭化した木材が貼りついており、壁の組み方は木組みであった可能性が高い。床面は地山の黄褐色土が元々比較的引き締まっており、特別硬化している様子はみられないが、遺構内部の埋土に含まれる少量の炭化物や、床面の1/3ほどの範囲に不整形にめぐる炭化物が存在していることから、火を伴う工房的な作業空間があり、それに伴う作業小屋的建物が建っていた可能性がある。また、周囲に出土する、



第12図 D6区SK-2平面図・セクション図(1/40)



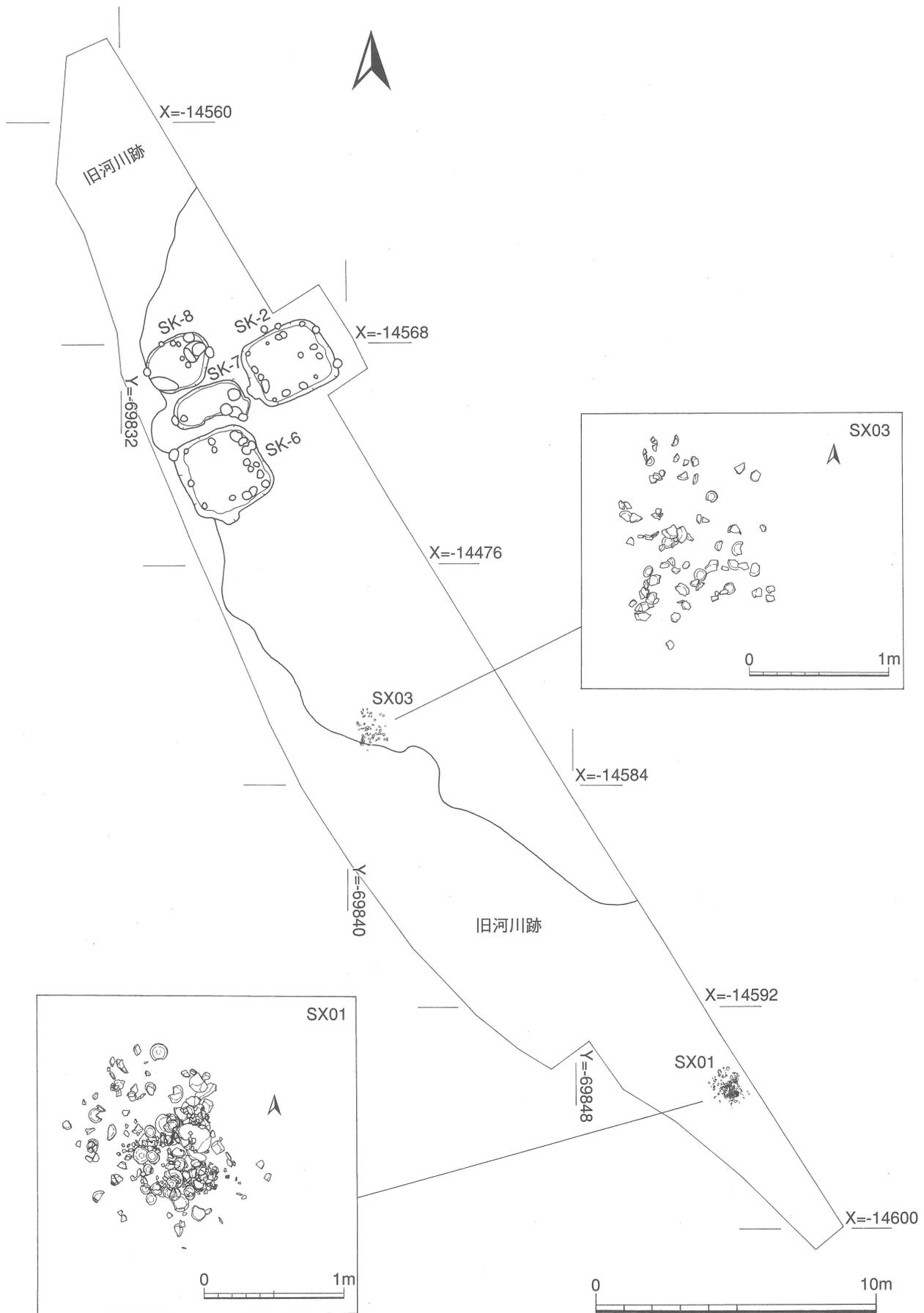
第13図 D6区SK-6平面図・セクション図(1/40)

鉄滓や鉄塊系遺物、製鉄炉などからもそのことが想定できよう。出土遺物は、土師質土器、石鍋、青磁片、白磁片、緑釉陶器片が出土しており、13世紀～16世紀の年代が考えられる。

**SK-6**：SK-6（第13図）は、方形プランで、床面積およそ8.22㎡を測り、長軸3.10m、短軸約2.65mである。床面周縁に12基の柱穴を配置する。柱穴は床面東側周縁に設置され、西側付近は調査区外で遺構が途切れていたたり、旧河川跡が遺構を流れた形跡がみられ、柱穴は検出されていない。また、SK-2に比べ残存壁高が浅く、床面の一部に炭化物が僅かに貼りついており、こちらも継続的ではないが、火を使ったものと考えられる。壁面には木材の痕跡はなかった。出土遺物は、残存状況が2/3程の土師質土器の坏1点が床面直上あたりから出土している。その他、青磁片や白磁片などSK-2とほぼ同時期の時代の遺構だと考えられる。

【参考文献】

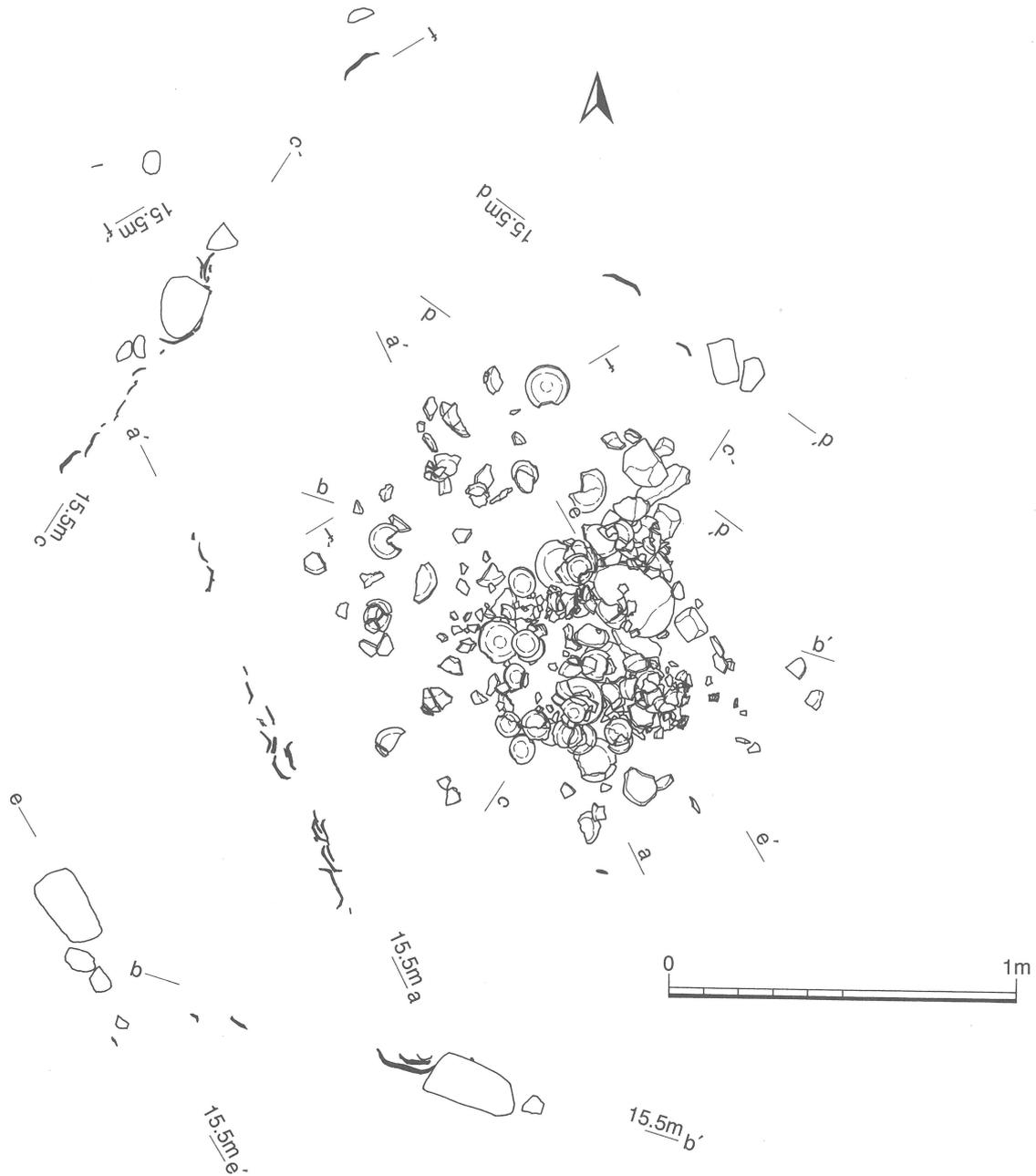
- 永井孝宏 2006. 4 「北条得宗家の領域支配についての考古学的考察—熊本県内の「堅穴建物」を素材として—」『肥後考古』第14号 肥後考古学会  
 宮本長二郎 2001 「中世集落遺跡 建築遺構のまとめ方」『掘立と堅穴』東北中世考古学叢書2 東北中世考古学会編 高志書院  
 斎木秀雄 1989 「方形堅穴建築址の構造」『よみがえる中世3 武士の都 鎌倉』平凡社  
 堀内明博 2001 「5 都市の機能と住人」『図解・日本の中世遺跡』（小野正敏他編）東京大学出版会



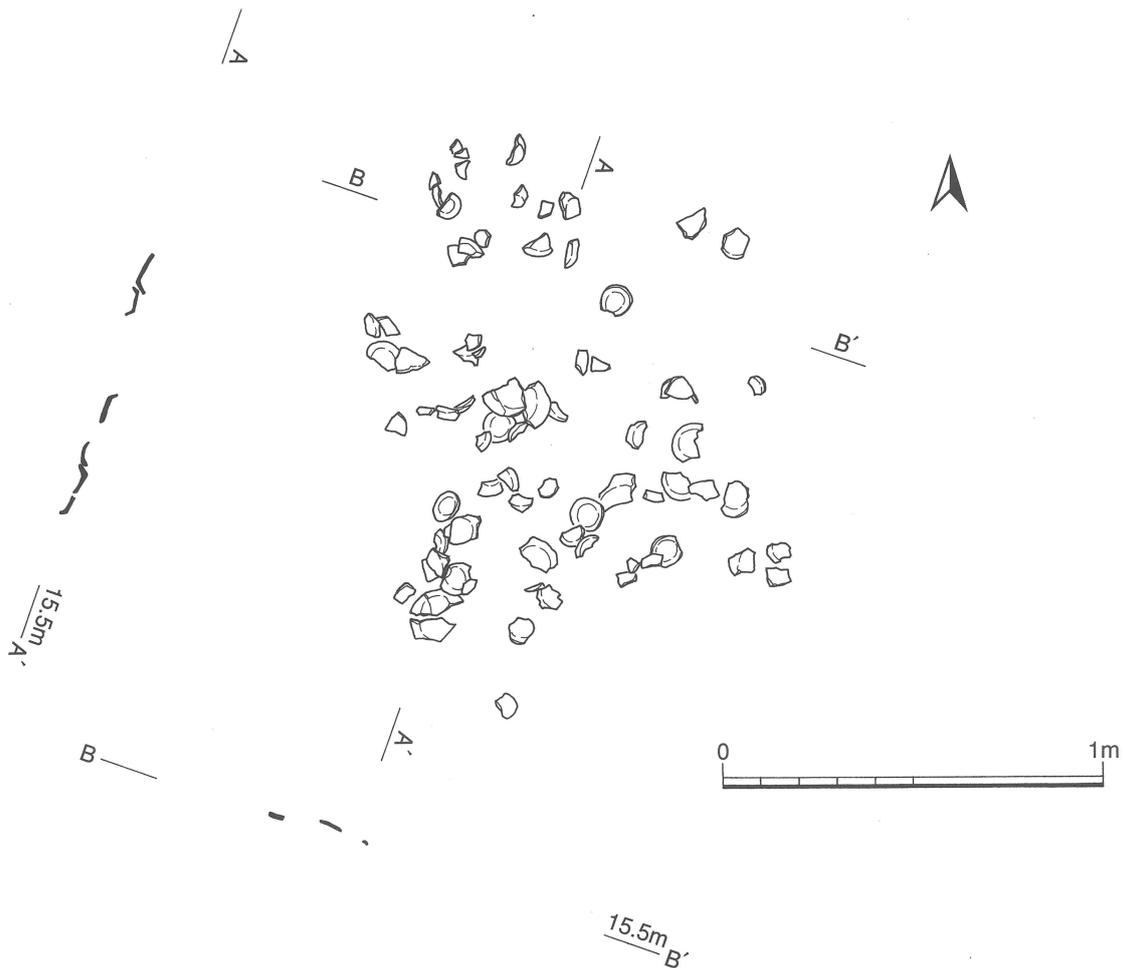
第14図 D 6区遺構配置図 (1/40・1/200)

#### 第4節 旧河川跡と出土遺物

D6区では、西郷川と同様な南から北へ流れる旧河川跡が検出され、覆土は、黒褐色土（河川堆積層）を主体とし、中世の遺物を包含している。遺物は、土師質土器、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁、白磁、瓦器椀、石鍋、滑石製品、灰釉陶器、合子、鉄滓などが多数出土している。しかしながら、周辺に弥生時代や古墳時代の遺構・遺物が確認されている為か、旧河川跡には弥生時代の遺物も含まれていた。旧河川跡は、現状の水田の用排水路溝に沿うように南東から北方向へ蛇行している。用排水路溝を造成した際に、川に沿って工事を行っているということが、旧河川跡の範囲が片側しか検出されなかった事や溝のカーブが旧河川跡のカーブと平行している事から看取できる。また、調査期間中に、新たな隣接する道路についても調査対象となり、D6区は西へ拡張されることとなった。それにより、北側と南側の河川堆積が同一なものとして、確認することができた。

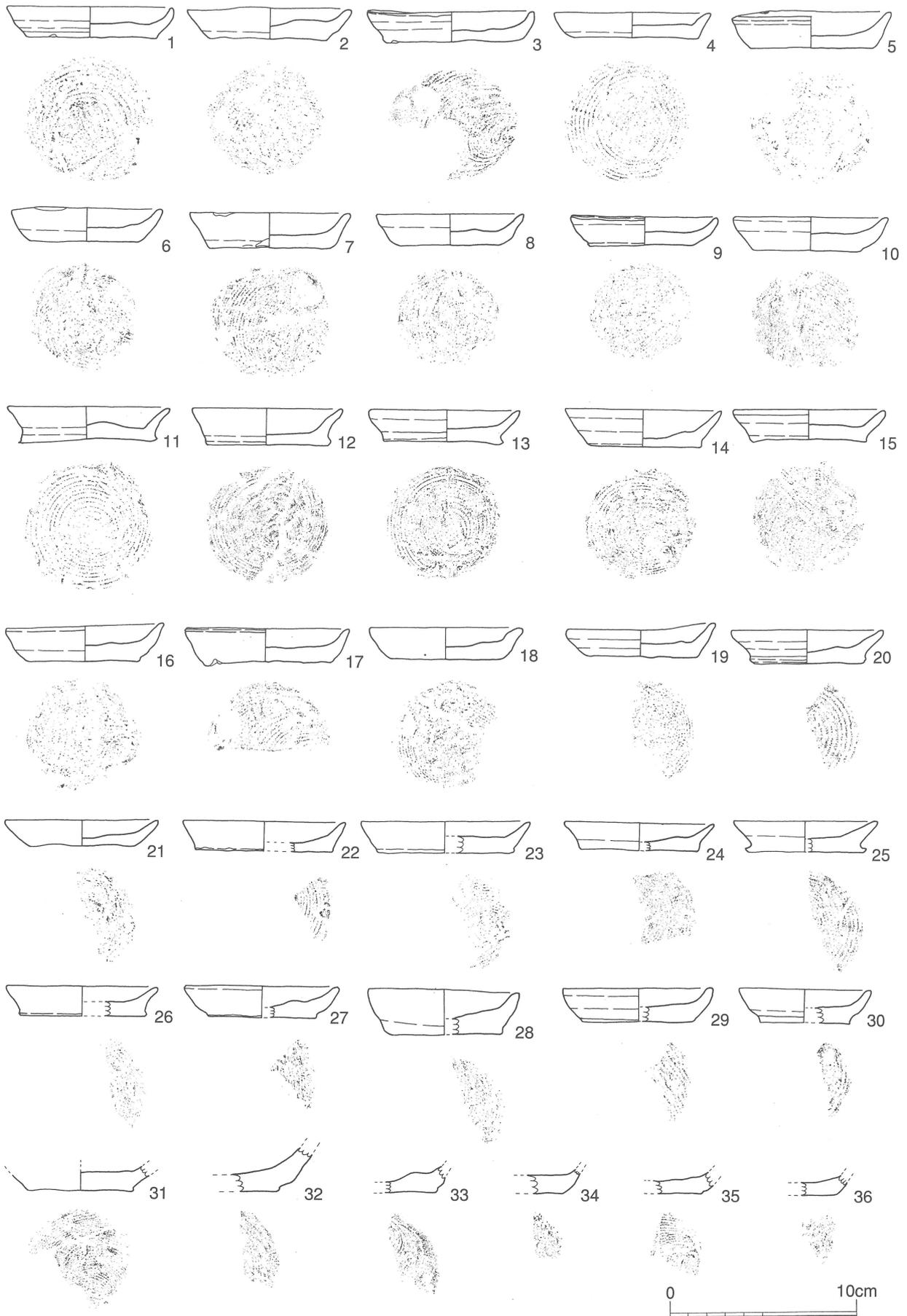


第15図 D6区 SX01平面図・セクション図 (1/20)



第16図 D 6 区 SX03平面図・セクション図 (1/20)

SX01・SX03は、旧河川跡の堆積層と拡張された調査区の旧河川跡の川縁の堆積層を掘り下げていく過程で、標高15.5m付近で大量土師質土器の検出がされた。SX01・SX03ともに土師質土器小皿、坏が1ヶ所に集中している出土状況であるが、掘り込まれた形跡はない。SX01は、1m×1m内に納まるほど、密集して出土し、坏の口縁部の一部を人為的に打ち欠いているものがみられ、ほぼ同形の皿、坏を使用している。また、土師質土器の下部より、人頭大や拳大の礫が13個出土し、一番大きな礫の上に坏を逆さに置いている状況は意図的であり、坏の上に小皿を重ね置きしている様子もいくつかみられた。そのため、SX01は祭祀遺構と推測できる。水霊に対する信仰は、祭祀を行う際、供養の品々は水中に納められることが多く、遺構はほとんど残らない。したがって、SX01で検出された状況や、土が堆積した様子からは、水の流れが減少した時もしくは若干干上がった時に何らかの祭祀が行われた可能性が高く、遺物は水に流されずに残っていた、と考えられる。土師質土器の取り上げ数は、163点を数えるが、周囲一括で取り上げた破片を合わせると、ゆうに300点以上は土師質土器の小皿・坏を使用していたものと考えられる。SX03は、拡張された部分の旧河川跡の川縁、つまり中世の遺構検出面上で出土している。SX01と違って、土師器の出土状況に統一性はなく、打ち欠いているものや、重なっている様子のものではないが、形態、法量、底面に残る切り離し痕の特徴はSX01の土師質土器と類似しており、同時期に生産されたということが想定できる。祭祀遺構とは言い難いが、おそらく祭祀遺構に使用されなかった供献土器を一括廃棄したものではないかと考えられる。取り上げは一括で行い、数は150個体は超えている。



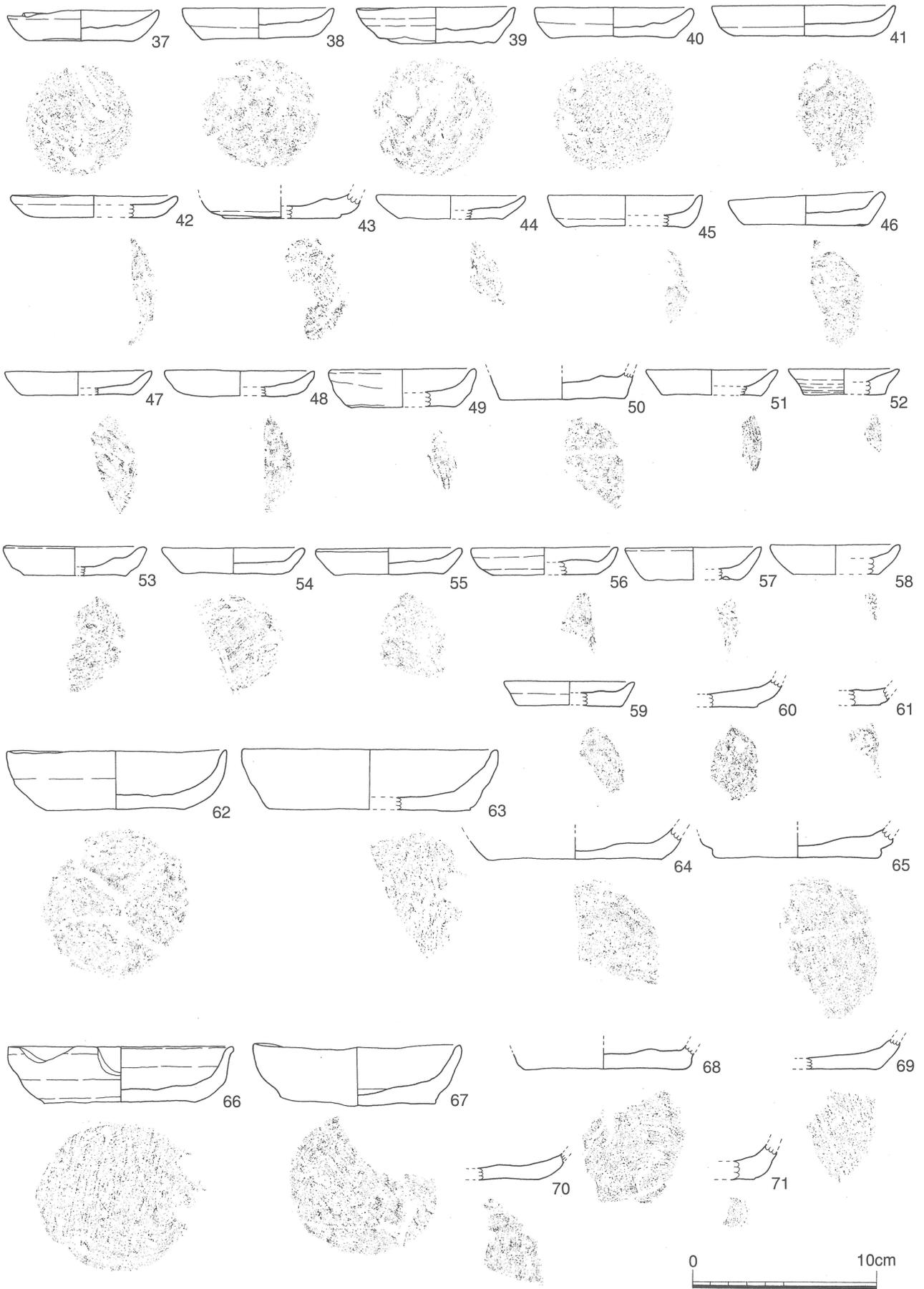
第17図 D 6区 SX01出土土師質土器①・皿 (1/3)

## SX01の出土遺物

第17図～第20図までは土師質土器の小皿・坏の資料である。1～61は土師質土器の小皿である。

1は口径8.7cm、器高1.7cm、底径6.9cm。内面に回転利用の横ナデ調整がみられ、外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部から口縁部にかけては外湾→内湾である。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離した後、板状工具によるハケメ状整形を施す。2は口径8.7cm、器高1.7cm、底径6.2cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾→内湾し、口縁部は外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離した後、指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。3は口径8.7cm、器高1.6cm、底径6.8cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察される。底部外面は回転を利用した糸切り離した後、指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。4は口径8.4cm、器高1.4cm、底径6.7cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部からやや直線気味に外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は櫛目状工具を回転させて15条のカキ目調整を施す。5は口径8.4cm、器高2cm、底径6.5cm。内外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部から直線的に立ち上がり胴部をなし、口縁部は外湾する。底部外面は回転を利用した糸切り離した後、木目を利用したハケメ状整形を施す。6は口径8cm、器高1.8cm、底径5.8cm。内面に回転利用の横ナデ調整がみられ、外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部から外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離した後、木目を利用したハケメ状整形を施す。7は口径8.4cm、器高1.9cm、底径6.5cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から口縁部にかけて内湾→外湾する。器壁は厚く、底部外面はやや静止気味の糸切り離した後、指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。8は口径7.8cm、器高1.7cm、底径5.4cm。内外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部から外湾→内湾→外湾→内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離した後、木目利用のハケメ状整形を施す。9は口径7.7cm、器高1.5cm、底径5.6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整後、外面および底部内面に割り板の木目を利用したハケメ状整形痕がみられる。底部から外湾→内湾→内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離した後、木目利用のハケメ状整形痕と指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。10は口径8.2cm、器高1.8cm、底径5.8cm。内外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部から外湾→内湾→外湾する。底部外面は回転を利用した糸切り離した後、木目を利用したハケメ状整形を施す。11は口径8.7cm、器高1.8cm、底径7.2cm。内面に回転利用の横ナデ調整がみられ、外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部から外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は櫛目状工具を回転させてつける16条のカキ目調整を施す。12は口径8cm、器高2cm、底径6.5cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から口縁部にかけて外湾→内湾する。底部外面は回転を利用した糸切り離した後、ナデ調整を施す。13は口径8cm、器高1.7cm、底径6.4cm。内面に回転利用の横ナデ調整がみられ、外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部から外湾し直線的に引き上げている。底部外面は回転を利用した糸切り離しを施す。14は口径8.4cm、器高2cm、底径6.2cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾し直線的に引き上げている。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離した後、ナデ調整を施す。15は口径8cm、器高1.6cm、底径6cm。内面は回転利用の横ナデ調整がみられ外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみ

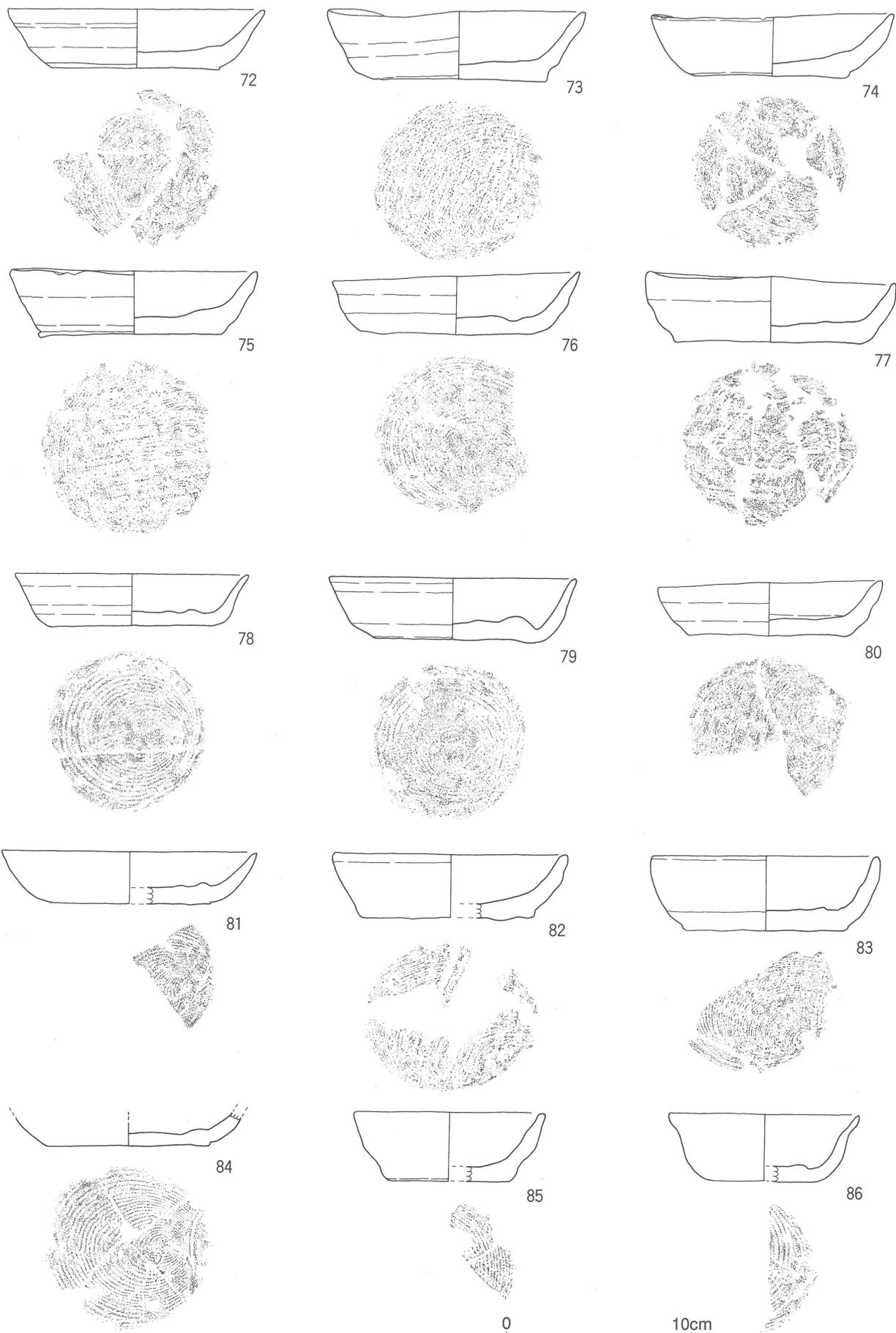
られる。底部から外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。器壁は厚く、底部外面は回転を利用した糸切り離し後、木目を利用したハケメ状整形を施す。16は口径8.4cm、器高1.9cm、底径5.9cm。内面に回転利用の横ナデ調整がみられ、外面に回転利用の横ナデ調整後木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部から内湾→外湾→内湾→外湾する。底部内面にハケメ状整形痕とナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、木目を利用したハケメ状整形を施す。17は口径8.7cm、器高1.8cm、底部6.9cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から口縁部にかけて内湾→外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。18は口径8.2cm、器高1.7cm、底径5.8cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。19は口径8cm、器高1.4cm、底径6cm。内面に回転利用の横ナデ調整がみられ外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部からやや直線気味に外湾する。底部内外面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。20は口縁部復元直径8cm、器高1.8cm、底部復元直径5.4cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は櫛目状工具を回転させた、現状7条のカキ目調整を施す。21は口縁部復元直径8cm、器高1.4cm、底部復元直径5.6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しを施す。22は口縁部復元直径8.6cm、器高1.6cm、底部復元直径7.2cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾し直線的に引き上げている。底部外面は櫛目状工具を回転させた、現状10条のカキ目調整を施す。23は口縁部復元直径9cm、器高1.7cm、底部復元直径7cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾する。底部内面にナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、ナデ調整を施す。24は口縁部復元直径8cm、器高1.5cm、底部復元直径6.2cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾し直線的に引き上げている。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、木目を利用したハケメ状整形を施す。25は口縁部復元直径7.6cm、器高1.7cm、底部復元直径6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾し直線的に引き上げている。底部外面は回転を利用した糸切り離しを施す。26は口縁部復元直径8cm、器高1.6cm、底部復元直径6.6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から口縁部にかけて外湾→内湾する。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、ナデ調整を施す。27は口縁部復元直径8cm、器高1.7cm、底部復元直径5.8cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から口縁部にかけて外湾→内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離しを施す。28は口縁部復元直径8cm、器高2.2cm、底部復元直径5.6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から内湾する。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、ナデ調整を施す。29は口縁部復元直径8cm、器高1.8cm、底部復元直径6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から内湾する。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しを施す。30は口縁部復元直径7cm、器高1.8cm、底部復元直径4.8cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から口縁部にかけて外湾→内湾する。底部外面は回転を利用したヘラ切り離し後、指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。31は器高約1.2cm、底径5.6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後ナデ調整を施す。32～35は破片であるため法量はわからない。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部外面は回



第18图 D 6区 SX01出土土師質土器②・皿、坏 (1/3)

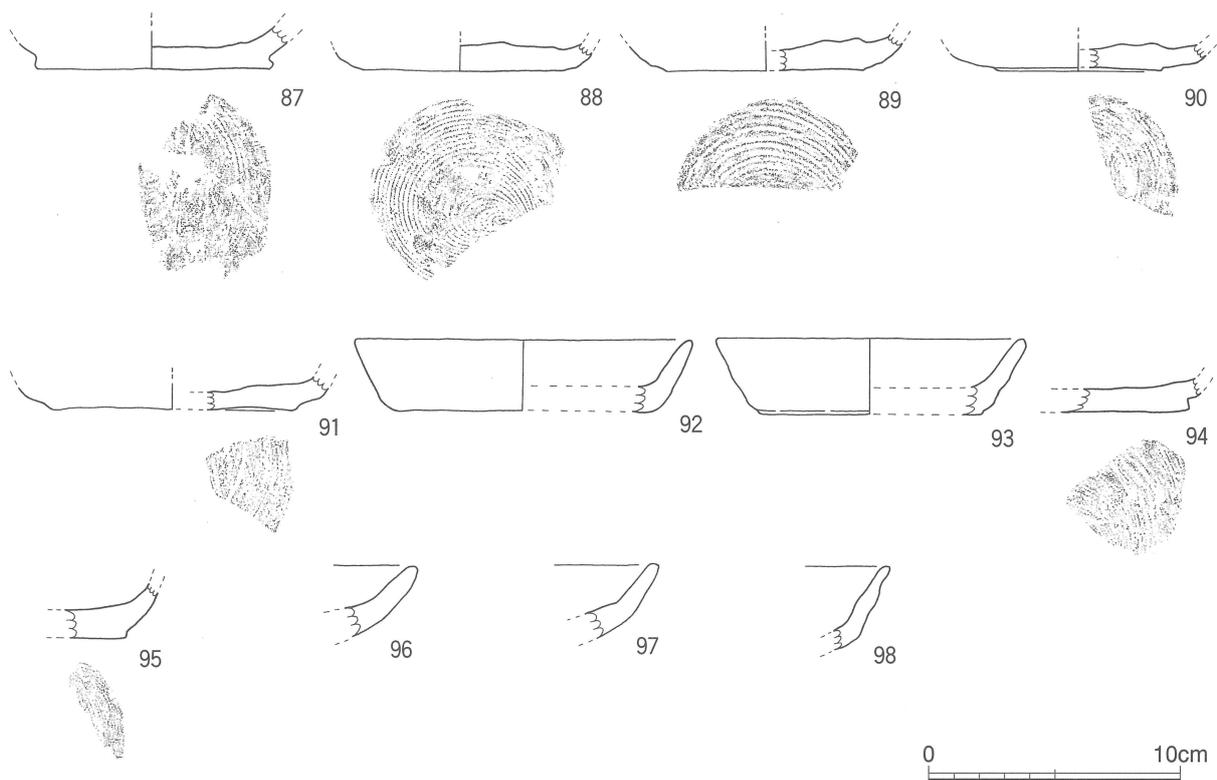
転を利用した糸切り離しを施す。36は破片であるため法量はわからない。内外面に回転利用の横ナデ調整を施す。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しを施す。37は口径8.3cm、器高1.7cm、底径6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離し後、指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。38は口径8.2cm、器高1.6cm、底径6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。口縁形態はやや楕円形である。底部から口縁部にかけて外湾→内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離し後、指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。39は口径8.6cm、器高2cm、底径6.4cm。内外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部から口縁部にかけて外湾→内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面はやや静止気味のヘラ切り離し後、指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。40は口径8.6cm、器高1.6cm、底径6.8cm。内外面は回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から口縁部にかけて外湾→内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は、回転を利用した糸切り離し後、木目利用によるハケメ状整形痕と指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。41は口縁部復元直径10cm、器高1.7cm、底部復元直径7.6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から内湾する。底部外面は回転を利用したヘラ切り離し後、指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。42は口縁部復元直径9cm、器高1.2cm、底部復元直径6.8cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾する。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しを施す。43は器高約1.4cm、底部復元直径6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離し後、ナデ調整を施す。44は口縁部復元直径8cm、器高1.9cm、底部復元直径5.6cm。内面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられ、外面に回転利用の横ナデ調整を施す。底部から外湾する。器壁が薄く、底部外面は回転を利用したヘラ切り離し後、木目を利用したハケメ状整形を施す。45は口縁部復元直径8.4cm、器高1.7cm、底部復元直径6.8cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から内湾する。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しを施す。46は口縁部復元直径8.4cm、器高約1.6cm、底部復元直径6.7cm。内外面は回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離し後、木目を利用したハケメ状整形を施す。47は口縁部復元直径8cm、器高1.3cm、底部復元直径6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾する。器壁が薄く、底部外面は回転を利用した糸切り離し後、ヘラ調整を施す。48は口縁部復元直径8cm、器高1.4cm、底部復元直径5cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾する。底部外面は回転を利用したヘラ切り離し後、木目を利用したハケメ状整形を施す。49は口縁部復元直径8cm、器高2.1cm、底部復元直径5.6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾→内湾→外湾→内湾する。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しを施す。50は器高約1.5cm、底径6.8cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。口径が底径より僅かに大きいもので、底部から直線的に立ちあがり胴部をなす。器壁が厚い。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しを施す。51は口縁部復元直径7cm、器高1.4cm、底部復元直径5.4cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。口径が底径より僅かに大きいもので、底部からやや直線的に立ちあがり胴部をなす。底部から外湾する。底部外面は回転を利用した糸切り離しを施す。52は口縁部復元直径6cm、器高1.4cm、底部復元直径4.4cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。口径が底径より僅かに大きいもので、底部から外湾し、やや直線的に引き上げて立ちあがり胴部をなす。底部外面は、回転を利用したヘラ切り離しを施す。53は口縁部復元直径8cm、器高1.5cm、底部復元

直径6cm。内外面は回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から口縁部にかけて外湾→内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離しを施しているが、磨耗しているため痕跡が消えかけている。**54**は口径7.8cm、器高1.4cm、底径5.4cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾するが、部分的に内湾しているところもみられる。底部内面は回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離し後、木目を利用したハケメ状整形を施す。**55**は口縁部復元直径8cm、器高1.4cm、底径6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾する。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しを施す。**56**は口縁部復元直径8cm、器高1.5cm、底部復元直径5.6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から口縁部にかけて外湾→内湾する。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しを施す。**57**は口縁部復元直径7.4cm、器高1.8cm、底部復元直径5.2cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾する。底部外面はやや静止気味のヘラ切り離しを施す。**58**は残存状況が悪く、器高1.6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から内湾する。底部外面は、残存状況が悪いため詳細は不明である。**59**は口縁部復元直径7cm、器高1.3cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。口径が底部より僅かに大きいもので、底部から直線的に立ち上がり胴部をなす。底部から外湾する。底部外面は回転利用のヘラ切り離しを施す。**60・61**は破片であるため法量は不明である。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。60の底部外面は回転を利用したヘラ切り離し後、木目を利用したハケメ状整形を施す。61の底部外面はやや静止気味のヘラ切り離しを施す。**62～98**は土師質土器の坏である。**62**は口径12cm、器高3.2cm、底径7.8cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。体部がやや丸みを帯び、底部から内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、ナデ調整を施す。**63**は口縁部復元直径14cm、器高3.3cm、底部復元直径9cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。外面はナデ調整が強く、やや雑に整形しており、全体的に波打っている。底部から内湾する。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しを施す。**64**は器高約1.4cm、底部復元直径9.4cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、ナデ調整を施す。**65**は器高1.6cm、底部復元直径8.8cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しを施す。**66**は口径12.3cm、器高3cm、底径8.4cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。体部がやや丸みを帯び、底部から外湾→内湾→外湾する。口縁部が欠損しているが、外湾気味に口縁部がつく。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、板状工具によるハケメ状整形を施す。**67**は口径11.2cm、器高3.2cm、底径8.4cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾→内湾→内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸と木目利用のハケメ状整形痕が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しを施す。**68**は器高約1.3cm、底部復元直径8.8cm。内面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用によるハケメ状整形痕がみられる。外面は残存状況が悪いため、詳細はわからない。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、ナデ調整を施す。**69**は破片であるため法量は不明である。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、木目を利用したハケメ状整形を施す。**70**は破片であるため法量は不明である。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しを施す。**71**は破片であるため法量は不明である。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部外面は残存状況が悪いため、詳細は不明である。



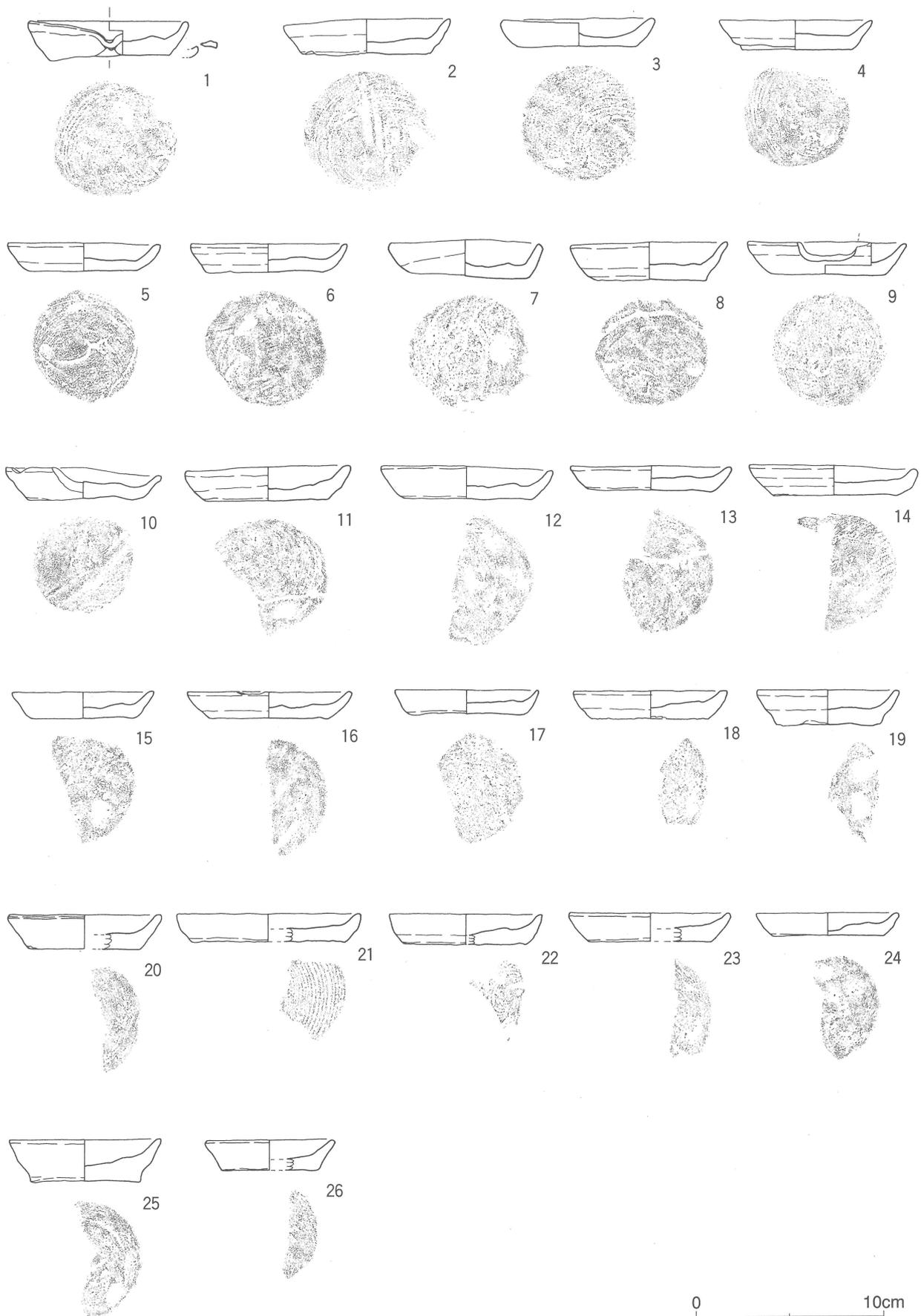
第19図 D 6区 SX01出土土師質土器③・坏 (1/3)

72は口縁部復元直径13.6cm、器高3.2cm、底径8.8cm。内面に回転利用の横ナデ調整を施し、外面は横ナデ調整後、木目利用したハケメ状整形痕がみられる。底部から口縁部にかけて内湾→外湾する。底部内面に木目利用のハケメ状整形を施す。底部外面は回転を利用した糸切り離しを施す。73は口径13.7cm、器高3.7cm、底径9.3cm。内外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。形態はやや楕円形であり、口縁部が水平ではなく僅かに波打つ。底部から外湾→外湾→内湾する。底部内面にナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、木目利用のハケメ状整形痕を施す。74は口径12.8cm、器高3.2cm、底径8cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾→内湾→内湾する。底部内面にナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しを施す。75は口径13.2cm、器高3.4cm、底径9.7cm。内面に回転利用の横ナデ調整後、ヘラナデ痕がみられる。外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾→内湾→外湾→内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離しを施す。76は口径13.2cm、器高3.1cm、底径8.2cm。内外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形がみられる。底部から内湾→外湾→内湾→外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、ナデ調整とヘラで調整を施す。77は口径13.4cm、器高3.5cm、底径9.2cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。口縁部が粗雑で波打つ。底部から内湾→外湾→内湾する。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しを施す。78は口径12.4cm、器高2.8cm、底径8.5cm。内外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部から口縁部にかけて内湾→外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は櫛目状工具を回転させて18条のカキ目調整を施す。79は口径13cm、器高3.3cm、底径8.2cm。内面に回転利用の横ナデ調整がみられる。外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部から口縁部にかけて内湾→外湾する。底部内面には、ナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、ナデ調整及び木目利用のハケメ状整形を施す。80は口径12cm、器高2.8cm、底径8.4cm。内外面に回転利用した横ナデ調整後、木目利用したハケメ状整形を施す。底部から外湾→内湾→外湾する。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、木目を利用したハケメ状整形を施す。81は口縁部復元直径13.6cm、器高2.8cm、底部復元直径8.5cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から口縁部にかけて内湾→外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離しを施す。82は口径12.3cm、器高3.4cm、底径8.7cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾→内湾→内湾する。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、ヘラで調整を施す。83は口縁部復元直径12.2cm、器高4cm、底部復元直径8.2cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾→内湾→内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離しを施す。84は器高約1.6cm、底径8.7cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、ヘラで調整を施す。85は口縁部復元直径10cm、器高3.7cm、底部復元直径6.4cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から内湾→外湾→内湾する。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、木目を利用したハケメ状整形を施す。86は口縁部復元直径10cm、器高3.6cm、底部復元直径5.6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から口縁部にかけて内湾→外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は櫛目状工具を回転させた、現状7条のカキ目調整を施す。



第20図 D 6区 SX01出土土師質土器④・坏 (1/3)

87は器高約1.7cm、底部復元直径9cm。内面に回転利用の横ナデ調整がみられる。外面は残存状況が良くないがナデ調整と考えられる。底部から外湾する。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、ヘラで調整を施す。88は器高約1.1cm、底径7.7cm。内面に回転利用の横ナデ調整がみられる。外面は残存状況が良くないため詳細はわからない。底部から外湾→内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離しを施す。89は器高約1.2cm、底部復元直径7.6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾→内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は櫛目状工具を回転させて現状12条のカキ目調整を施す。90は器高約0.9cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾→内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離しを施す。91は器高約1.2cm。内外面に回転利用の横ナデ調整を施す。底部から外湾→内湾する。底部外面は回転を利用したヘラ切り離し後、木目を利用したハケメ状整形痕を施す。92は口縁部復元直径13cm、器高2.8cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から内湾→外湾する。93は器高3cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾→内湾→外湾→外湾する。94は器高約1.2cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾する。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、木目を利用したハケメ状整形痕を施す。95は器高約2.1cm。内外面に回転利用の横ナデ調整後、ヘラもしくは木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部から外湾→内湾する。底部外面は回転を利用したヘラ切り離しを施す。96～98は破片であるため法量は不明である。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部内面、底部外面は残存していないためわからない。98は内面に刃物かヘラによる整形痕が縦斜めにはいつている。



第21图 D 6区 SX03出土土師質土器①・皿 (1/3)

### SX03の出土遺物

第21・22図は土師質土器の小皿・坏の資料である。1～26は土師質土器の小皿である。

1は口径8cm、器高2.1cm、底径6.3cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。小皿の内部に液体を入れ、少量ずつ注ぐための用途か、径3mmの孔をつけた注ぎ口を形成している。底部から外湾する。底部内面にナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面はやや静止気味の回転を利用した糸切り離しを施す。2は口径8.7cm、器高1.8cm、底径6.7cm。内外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部から外湾→内湾→外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面はやや静止気味の回転を利用した糸切り離し後、木目を利用したハケメ状整形とヘラでの調整がみられる。3は口径7.6cm、器高1.5cm、底径6.2cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。口縁部の一部、底部内面が波状に整形されている。底部から外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面はやや静止気味の回転を利用した糸切り離し後、ヘラ調整を施す。4は口縁部復元直径8cm、器高1.6cm、底径5.7cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾する。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、ヘラで調整を施す。5は口径8cm、器高1.4cm、底径5.6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾→内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、木目を利用したハケメ状整形を施す。6は口径8.2cm、器高1.5cm、底径6.2cm。内外面は回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面はやや静止気味の回転を利用した糸切り離し後、木目を利用したハケメ状整形とナデ調整がみられる。7は口径7.8cm、器高2cm、底径6.4cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。口径が底径より僅かに大きいもので、底部から直線的に立ちあがる。底部から内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は静止ヘラ切り離しを施す。8は口径8.2cm、器高2cm、底径5.8cm。内面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。体部に二段の段がつく。底部から外湾→内湾→外湾する。底部外面は静止ヘラ切り離しを施す。9は口径8.3cm、器高1.7cm、底径6.1cm。内外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。口縁部に欠損がみられる。打ち欠きか。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、木目を利用したハケメ状整形とナデ調整がみられる。10は口径8.2cm、器高1.6cm、底径5.5cm。内外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。口縁部に欠損がみられる。打ち欠きか。底部から内湾→外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、ヘラ調整を施す。11は口径8.6cm、器高1.8cm、底径6.3cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。口縁部に欠損がみられる。打ち欠きか。底部から外湾→内湾→外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。12は口径9cm、器高1.7cm、底径6.8cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は静止ヘラ切り離しを施す。13は口径8.4cm、器高1.3cm、底径6.5cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は静止ヘラ切り離しを施す。14は口径8.4cm、器高1.6cm、底径6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。口唇部に指で縁をつぶした痕と爪もしくはヘラ先のようなもので刻んだ線がみられる。底部から外湾→内湾する。やや開き気味に引き上げている部分がみられ、全体的に変形する。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、木目を利用したハケメ状整形と指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。15は口縁部復元直径7.4cm、器高1.4cm、底径5.4cm。内外面に回転

利用の横ナデ調整がみられる。口縁部に欠損がみられる。打ち欠きか。体部に段がつく。僅かではあるが、口縁部がつく。底部から外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は静止ヘラ切り離しを施す。**16**は口縁部復元直径8.6cm、器高1.4cm、底径6.2cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸と二重の輪を形成している。底部外面は静止ヘラ切り離しを施す。**17**は口縁部復元直径7.6cm、器高1.3cm、底径6cm。内外面は回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面はやや回転を利用したヘラ切り離しを施す。**18**は口縁部復元直径8cm、器高1.5cm、底部復元直径6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は静止ヘラ切り離し後、指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。**19**は口縁部復元直径7.4cm、器高1.8cm、底部復元直径5.4cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾→内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は静止ヘラ切り離し後、指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。**20**は口縁部復元直径8cm、器高1.8cm、底部復元直径5.8cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。口縁部に欠損がみられる。打ち欠きか。底部から外湾する。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、木目を利用したハケメ状整形を施す。**21**は口縁部復元直径9.6cm、器高1.5cm、底部復元直径8cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾→内湾する。底部外面は回転を利用した糸切り離しを施す。**22**は口縁部復元直径8cm、器高1.6cm、底部復元直径6.3cm。内外面は回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から内湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は回転を利用した糸切り離し後、指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。**23**は口縁部復元直径8.4cm、器高1.5cm、底部復元直径6.4cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。口縁部に欠損がみられる。打ち欠きか。底部から外湾する。底部外面は静止ヘラ切り離しを施す。**24**は口縁部復元直径7.4cm、器高1.2cm、底径5.8cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から内湾→外湾する。底部内面には指ナデ調整による指頭圧痕が観察できる。底部外面は静止ヘラ切り離しを施す。**25**は口縁部復元直径8cm、器高2.2cm、底径5.8cm。内外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部から外湾→内湾→外湾する。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面は静止ヘラ切り離し後、指ナデ調整による指頭圧痕がみられる。**26**は口縁部復元直径6.6cm、器高1.6cm、底部復元直径5cm。内外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。口縁部に面取り痕が僅かにみられる。また口縁部に欠損がみられる。打ち欠きか。底部から外湾→内湾する。底部外面は静止ヘラ切り離しを施す。**27～34**は土師質土器の坏である。**27**は口径13.7cm、器高3.5cm、底径9.6cm。内面に回転利用の横ナデ調整がみられる。外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。口縁部が僅かに変形している。底部から外湾しながら直線的に引き上げられる。底部外面はやや静止気味の回転を利用した糸切り離し後、ヘラもしくは指ナデ調整が施される。**28**は口径14cm、器高3.2cm、底径10.6cm。内外面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。底部から外湾しながらやや直線的に引き上げている。底部内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。底部外面はやや静止気味の回転を利用した糸切り離し後、ヘラで調整を施す。**29**は口縁部復元直径13cm、器高3.2cm、底部復元直径8.4cm。内面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。外面に回転利用の横ナデ調整がみられる。底部から外湾→外湾→内湾する。体部がやや開き気味に引き上げられた後、直線的に上部へ立ちあがる。底部外面は静止ヘラ切り離しを施す。**30**は口縁部復元直径13.4cm、器高3.1cm、底径8.4cm。内面に回転利用の横ナデ調整後、木目利用のハケメ状整形痕がみられる。外面に回転を利用した横ナデ調整がみられる。体部がやや丸みを帯び、底部から内湾する。